3．遺構について

1号墳　　2段築成の方墳であり、今回の調査でみつかった古墳の中ではもっとも大きいものです。墳丘は、一辺が14m、下段の高さ70cm、上段の残存高70cmを測り、その周りには一辺が17.5m、墳丘裾からの幅2m、深さ70cmの周濠が巡っていました。墳丘の斜面には、直径10～40cmの河原石が敷きつめられ（葺石（ふきいし）といいます）ています。下段と上段との境目にはは幅が60cmの平らな部分が4辺にあり、円筒埴輪が立てられていました。後の時代に墳頂が削られているため、死者を葬った棺などの施設はみつかりませんでしたが、上段の斜面にも円筒埴輪のかけらが転落していたため、頂上にも円筒埴輪を並べ立てていたと思われます。また、周濠の中には、死者に対する祀りの跡がみつかりました。西側の周濠からは須恵器や土師器の他に、滑石という石で作られた、紡錘車と呼ばれる製品が出土しました。北側の周濠からは、馬の歯が1頭分みつかっています。これは1号墳に葬られた人物の道連れとしてささげられた（殉殺（じゅんさつ）といいます）馬であったのでしょう。また、墳丘の南西角に地割れがみられたり、南辺の東半が地滑りによって損傷を受けており、慶長の大地震（1596年）の影響が色濃く残っています。出土した土器から、5世紀後半に造られたと考えられます。

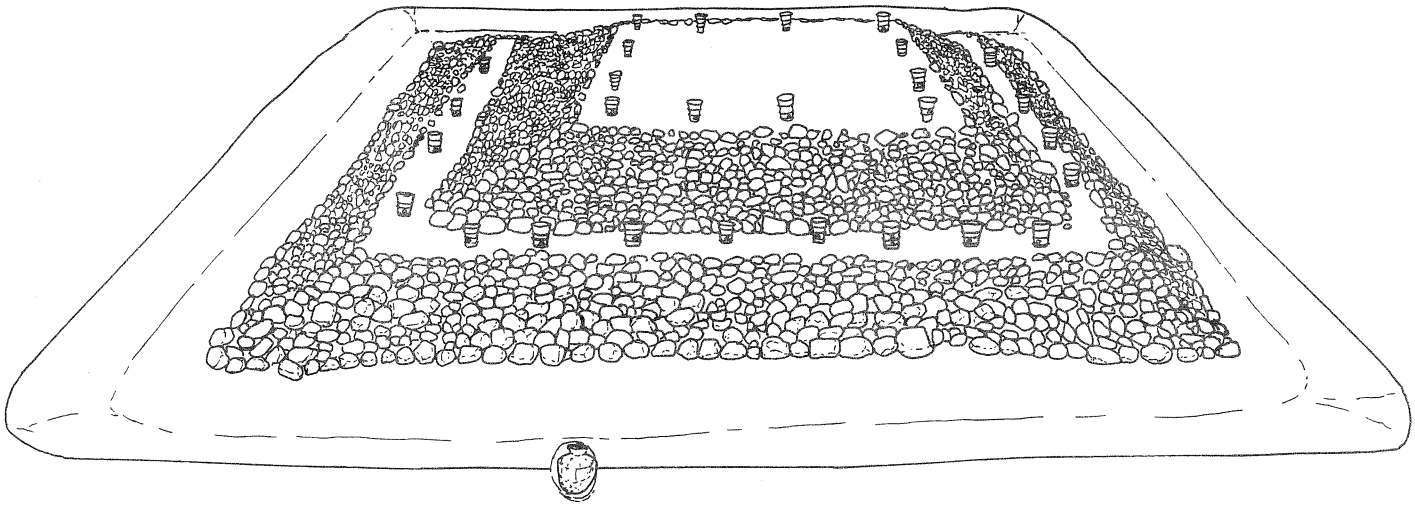


図4　1号墳復元図

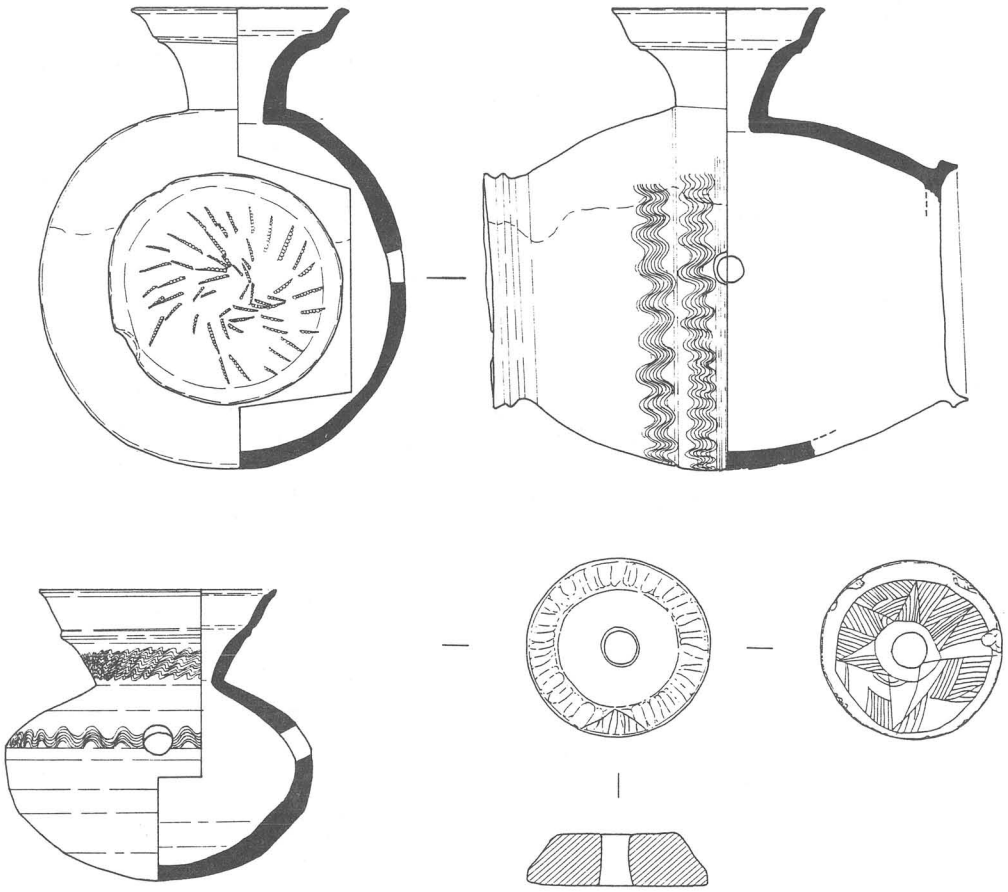


図5
1号墳周濠出土遺物
（S＝1／3・
紡錘車は2／3）

2号墳　　墳丘の一辺が10m、残存高50cmを測る方墳で、一辺が12m、墳丘裾からの幅1m、深さ40cmの周濠に囲まれていました。葺石は無く、埴輪もみつかっていませんが、周濠の南東隅付近からは須恵器の壺が、南西側からも須恵器の蓋坏（つきぶた）、高坏（たかつき）がみつかりました。壺は、周濠の外側斜面からみつかったため、周濠の外に供えてあったものが洪水などで溝の中に転落したものではないかと思われます。出土した土器から、5世紀後半に造られたと考えられます。

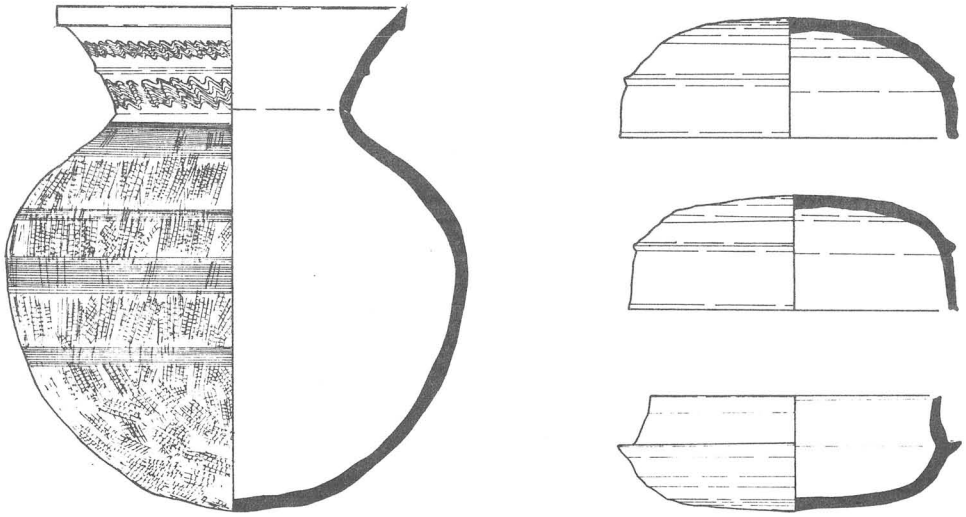


図6
2号墳周濠出土遺物
（S＝1／3）

5

3号墳　　墳丘の一辺が11.5m、残存高1.1mを測る方墳で、一辺が12.5m、墳丘裾からの幅1.3m、深さ50㎝の周濠に囲まれていました。変則的な2段築成をみせており、北半分は1段、南半分が2段の墳丘を持っています。埴輪は無く、葺石は四隅と、南半分の斜面の上段にのみ施されています。墳頂には、北側に木棺（長さ2.5m～×幅60㎝×深さ15㎝）、南側に河原石組みの石棺（長さ2.2m×幅40㎝×深さ27㎝）が、東西方向に向けて並んで据えられており、木棺の北隣りには鉄刀が1振、棺と平行に埋納されていました。周濠内には、南、北、西辺のそれぞれで須恵器・土師器が出土しており、南辺では紡錘車が1点出土しました。出土土器より、5世紀末～6世紀初頭に造られたと考えられます。

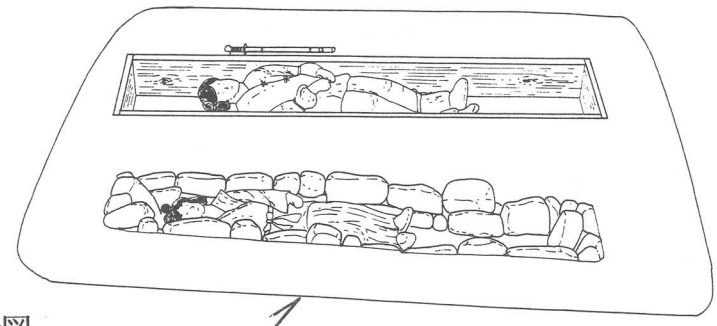


図7　3号墳主体部復元図

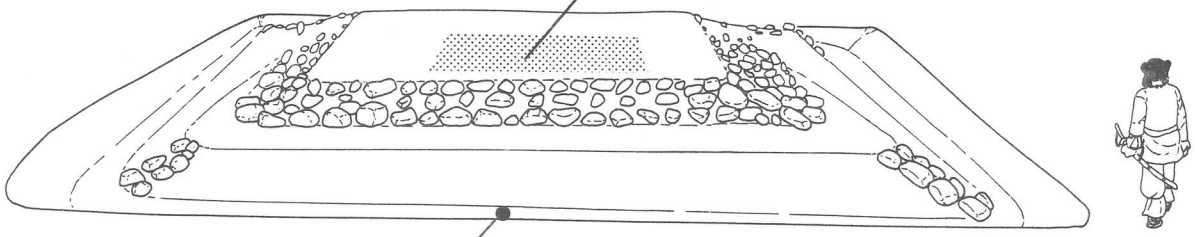


図8　3号墳復元図

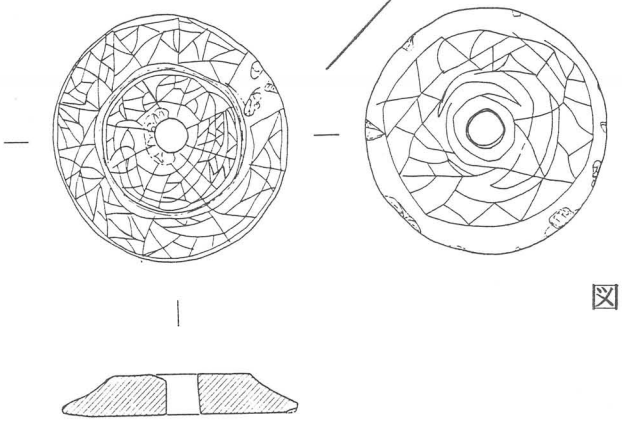


図9　3号墳周濠出土紡錘車　（S＝2／3）

4号墳　　墳丘の東西が11m、南北が４m以上、残存高80㎝を測る方墳で、一辺が12m、墳丘裾からの幅１.5m、深さ95㎝の周濠に囲まれていました。墳丘の頂部には、約２.5mおきに円筒埴輪が立てられていました。この古墳は南側が調査区外に外れており棺などの埋葬施設は確認できませんでした。周濠内には土器などの祀りの跡はみつかりませんでした。出土土器から、６世紀前半に造られたと考えられます。

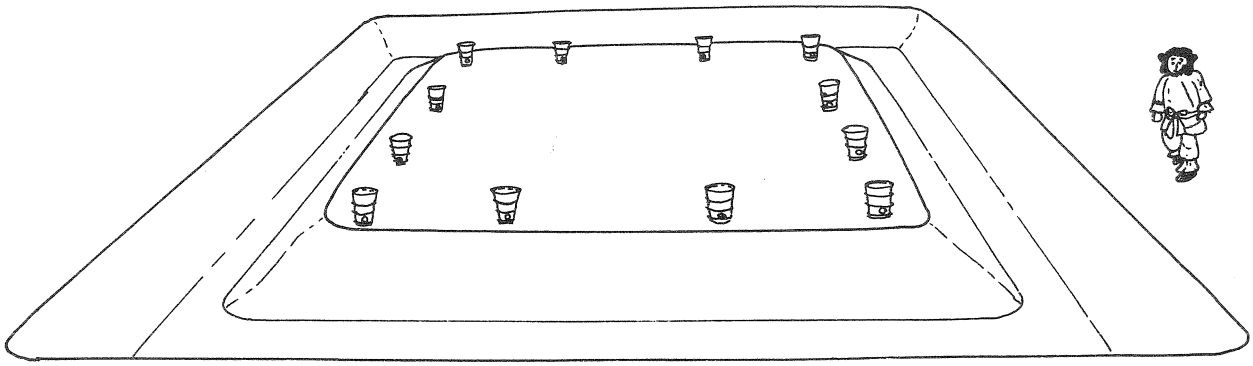


図10　４号墳復元図

5号墳　　この古墳は、後世の洪水、耕作などによって墳丘が完全に削られてしまっており、周濠のみで存在が確認されました。周濠は南北が10m、東西が8.5m、幅1.7m、深さ45㎝を測ります。周濠の南西角からは、脚部を折った土師器の高杯に須恵器の蓋坏が据えられた状態で、３セット出土しています。古墳に埋められた死者に対する捧げ物を入れた器でしょうか。その他、円筒埴輪も落ち込んでいましたので、墳頂に据えられていたのでしょう。出土土器より６世紀前半に造られたと考えられます。

6号墳　　５号墳の北隣りでみつかりました。この古墳も５号墳と同様に、周濠しか検出されていません。周濠の規模は、一辺７m、幅80㎝、深さ20㎝です。西側の周濠からは、祭祀に用いられた土師器・須恵器がまとまって出土しています。出土土器より６世紀前半に造られたと考えられます。

7号墳　　５号墳の西側周濠と切り合った状態でみつかっています。墳丘は削られており、周濠のみが検出されました。周濠の規模は、一辺12.3m、幅１.2～１.8m、深さ25㎝です。これまでの住吉宮町遺跡の調査でみつかった古墳には、互いに重なり合って造られている古墳はごくまれであり、この古墳は、周囲の古墳が洪水で埋まってしまった後に造られた様です。周濠より出土した土器より、６世紀終わり頃に造られたと考えられます。

8号墳　　周濠のみがみつかりました。周濠の規模は、一辺７m、幅50～100㎝、深さ20㎝で、祀りに使われたと考えられる土器が出土しました。出土土器より、６世紀終わり頃に造られたものと思われます。

横穴式石室　ほぼ磁北方向（N10°W）に向いて造られており、中世の土坑、近現代の溝などによって削られ、墳丘はそのほとんどが、また石室の西半分も失われていました。残っていたのは、玄室（げんしつ）の東壁と、玄室に取りつく、羨道（せんどう）の東壁の一部のみでした。残っていた部分の規模は、玄室の長さ1.8m、高さ60㎝、羨道は長さ90㎝、高さ40㎝を測ります。また玄室の壁際に、6世紀中頃のものと考えられる須恵器の提瓶（壺型の容器）が2個、置かれていました。酒などの飲み物を供えた跡でしょう。

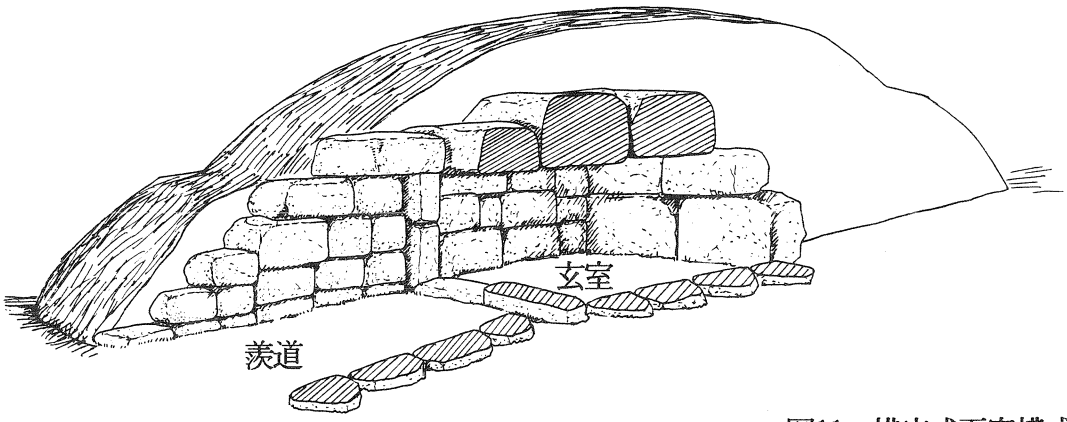


図11　横穴式石室模式図

石棺群　以上の古墳以外にも、河原石を組んで作られた石棺がみつかりました。出土遺物が非常に少ないので正確な時代は不明ですが、他の古墳同様、5～6世紀のものであると思われます。以下に規模その他を記します。

	縦（㎝）	幅（㎝）	深さ（㎝）	主軸方向
石棺墓1	104	35	30	N85°E
石棺墓2	150	25～30	28	N61°W
石棺墓3	60	13	24	N49°W
石棺墓4	165	25	24	N80°W
石棺墓5	120～	20～30	――――	N57°W
石棺墓6	60～	23	24	N66°E
石棺墓7	80	25～30	24	N60°W

埋設甕　1号墳の南側で出土した須恵器の甕で、口を北に向け、穴の中に寝かされた状態で据えられていました。復元すると、口の直径が30㎝、高さが60㎝ぐらいになります。また、埋めた時点ですでに割られていたと思われます。詳しい用途はわかりませんが、墓や、祀りなどに使用された可能性が考えられます。甕の埋められた時期は現在のところ不明ですが、1号墳よりは新しいものと思われます。

8

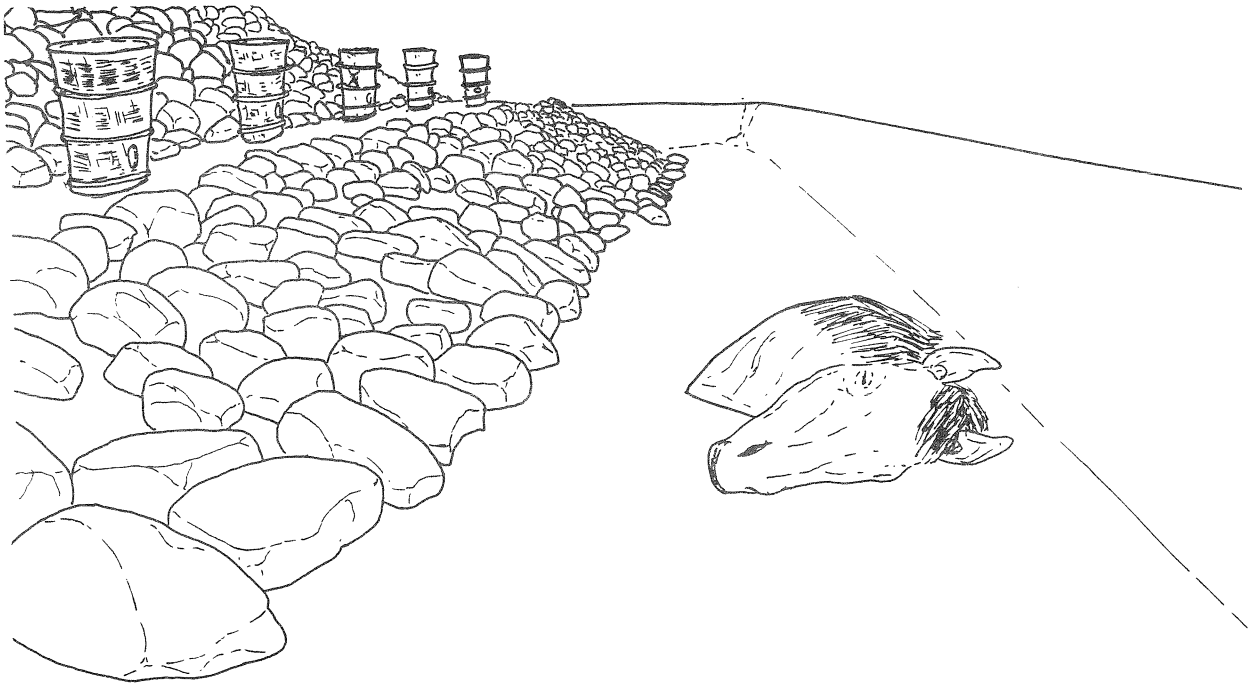
4．まとめ

今回の調査地は、住吉宮町遺跡の古墳群の中心付近に位置しており、これまでの調査において周辺の地区でみつかっているような古墳や石棺がみつかりました。両者は空間的に区分けして造られていたようで、今回の調査区内では、東半は古墳の区域、西半が石棺の区域と決められているように見受けられます。

これらの古墳は全てが方墳であり、これも、以前の調査の傾向と共通するものです。また、石棺群には墳丘をもつものは無く、地面に直接掘られた穴の中に、おおよその方向をそろえて作られています。また傾向としては、石棺群を構成している石棺には小さいものが多く、中にはあきらかに子供を埋葬したものもあるようです。

また、今回みつかった古墳の築造された順序は、１号墳が最も古く、西に向かうにしたがって新しくなっていくようです。これまでの調査例をみても、住吉東古墳や坊ヶ塚古墳といった小豪族クラスの墓の周りには村落内の有力者クラスの墓、さらに外側に、墳丘を持たない石棺墓群、といったように、階級差にのっとった配置が考えられます。今回の調査では最初に１号墳のような、葺石や円筒埴輪、２段築成といった要素を持つ古墳が造られ、それを中心に連続的に古墳が築かれていった様子、さらに外側に石棺群を配置して区別していた様子がうかがえます。これは住吉宮町遺跡の古墳が重なり合うこと無く、整然と造られていることからもうかがえます。

１号墳の北辺の周濠からは、馬の歯が１頭分出土しました。当時の人々は、亡くなった人が生前かわいがっていた馬をいっしょに埋めて、あの世へのおともにしてあげようと考えたのでしょうか。



１号墳からみつかった馬の歯は、推定年齢が３～４歳と比較的若い、健康な馬のものであったようで、決して病気やけがをしたような馬をえらんで埋めたわけでは無かったようです。馬を殉殺し、古墳にささげる習慣は、熊本県を中心とした九州地方、大阪府の北河内周辺、長野県伊那谷周辺に多くみられますが、兵庫県内において古墳にともなう馬の遺体がみつかったのは初めてのことです。

横穴式石室をもつ古墳は、北西に位置する郡家遺跡などでみつかっており、住吉宮町遺跡でも今回で２例目の発見となりました。

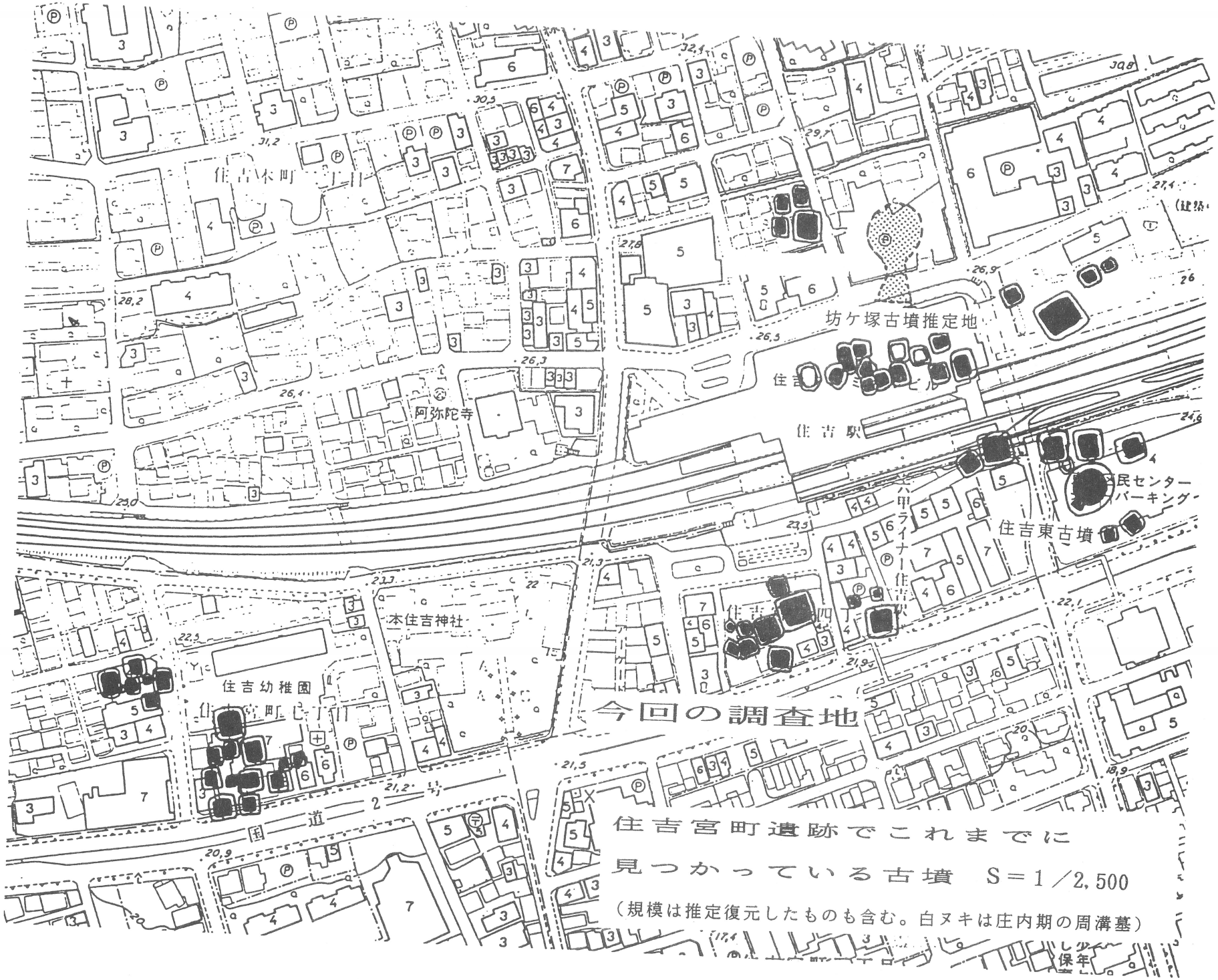
今回の調査では、慶長の大地震の痕跡とみられる、地滑りや地割れなどが多く観察され、地震が遺跡におよぼす影響がよくわかりました。

また、住吉宮町遺跡の古墳群全体をながめてみると、今回の調査地を中心に、半径300ｍほどの範囲に、数多くの古墳が密集して造られていることが想像されます。これだけ大規模な古墳群を営むには一つだけのムラ（生活集団）では、まかないきれない規模のものであったでしょう。それは、一つのムラだけの墓地というよりも、郡家遺跡など、住吉宮町遺跡の周辺に展開した複数の集団が集まってできた、共同の古墳祭祀の場であったのかもしれません。今後の調査によって古墳がさらにみつかり、坊ヶ塚古墳や住吉東古墳といった、この古墳群のなかでは階層的に上位に位置すると考えられる古墳を中心としたいくつかの古墳集団の集まりがみえてくると、当時の社会制度や、地域どうしのつながりがもっとくわしくわかってくるでしょう。

今回の調査では

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長　工楽善通先生
立命館大学文学部教授　和田晴吾先生
奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官
松井　章先生
にご指導いただきました。

また、ＪＲ住吉駅南地区市街地再開発組合
株式会社　熊谷組　のご協力を得ました。



住吉宮町遺跡でこれまでに見つかっている古墳　S＝1／2,500

（規模は推定復元したものも含む。白ヌキは庄内期の周溝墓）

用語解説

住吉東古墳　・・・昭和63年度の調査でみつかった古墳で、墳丘の形は帆立貝式古墳といい、円丘に方形の造出が付く。全長24m、円丘部径18m、高さ1.5mを測る。5世紀末～6世紀初頭の古墳である。

坊ヶ塚古墳　・・・平成9年度の調査でみつかった古墳であるが、以前から絵図面や地籍図に前方後円形の地割りがみられ、前方後円墳としての存在が想像、されていた。この時の調査では、円丘部のみが発見された。推定径は約35mであり、周囲の地形や周辺の調査結果を総合すると、それまでの想定であった前方後円墳ではなく、住吉東古墳と同じく帆立貝式古墳である可能性が高いと思われる。

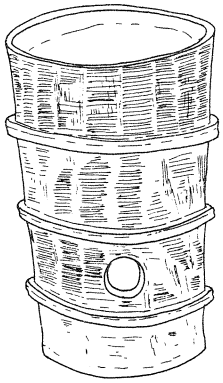
菟原郡　・・・・・律令制時代の行政単位の一つで、摂津国の中の、六甲山南麓に位置する。現在の神戸市灘・東灘区、芦屋市にあたる。

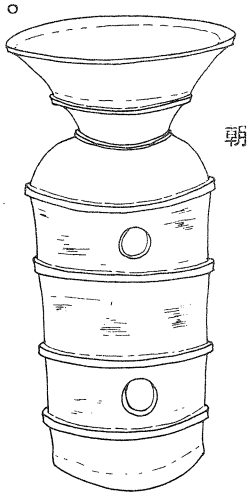
横穴式石室　・・・古墳の埋葬施設の一種で、墳丘の側面から入る構造の石室を言う。棺を納める玄室と、玄室への通路である羨道からなる。日本では朝鮮半島の影響をうけ、5世紀に九州、近畿地方に導入され、6世紀には全国各地に波及した。

円筒埴輪　・・・・埴輪とは、古墳の墳丘に立て並べる素焼きの土製品の総称である。円筒埴輪とは円筒形の埴輪であり、数条のタガ状突帯が胴部をめぐりその間に円形や長方形、三角形の透かし孔があけられる。埴輪のもっとも基本をなす形態であり、埴輪を持つ古墳で、円筒埴輪の無い例は無い。

紡錘車　・・・・・繊維に縒りをかけて糸にし、これを巻き取る道具を紡錘・紡輪といい、糸を巻き取る際に軸の回転に惰性を与えるはずみ車が紡錘車である。通常、石製もしくは土製であり、直径4～5㎝程度の偏平な円形をしており、中央に軸を通す孔が開く。古墳時代には石製のものが多く、文様などが描かれるものもある。

円筒埴輪



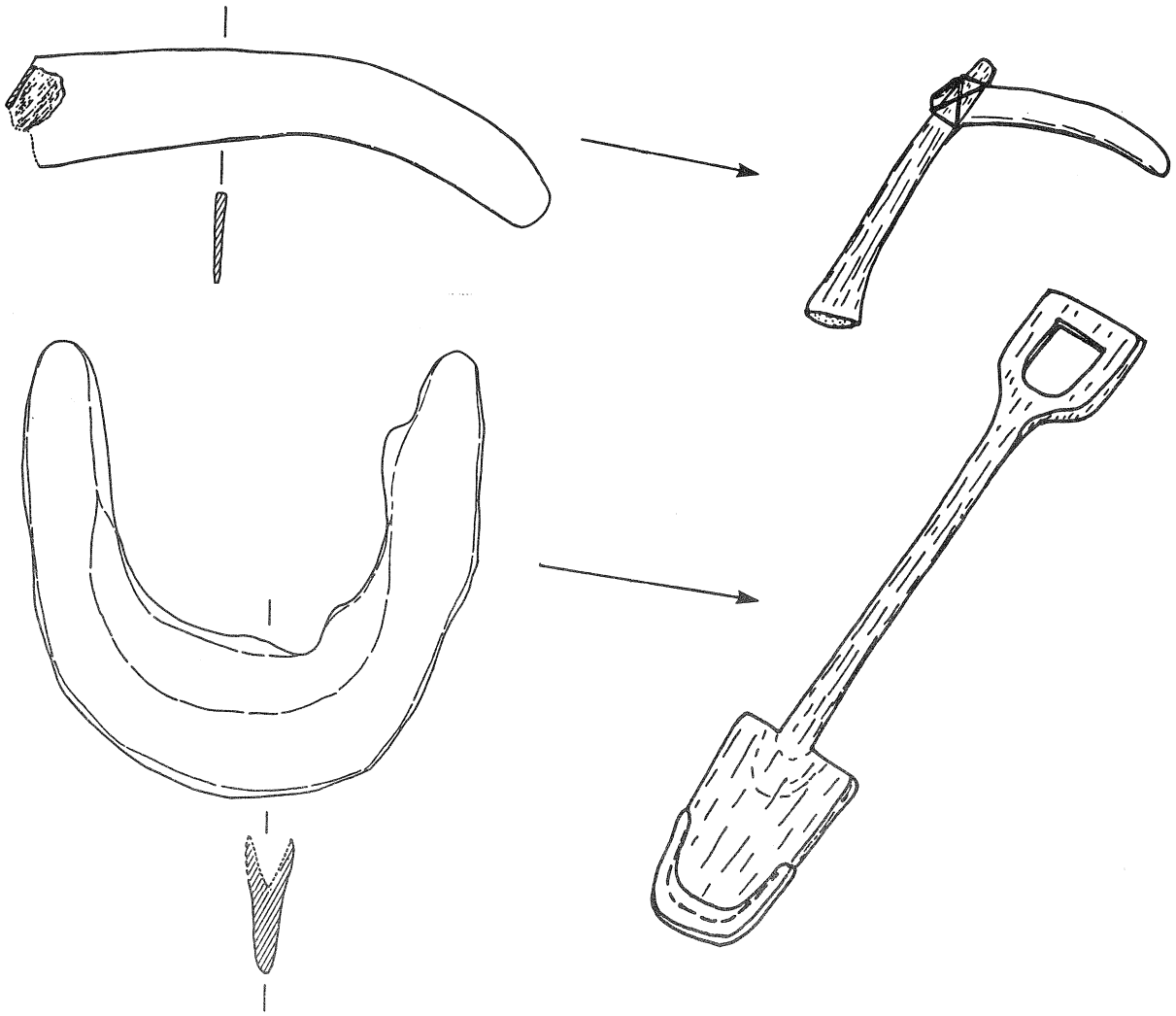


朝顔形埴輪

にのみや

二宮遺跡

現地説明会資料



平成11年3月7日

神戸市教育委員会

今回の調査では、

奈良国立文化財研究所　工楽善通氏

広島大学助教授　古瀬清秀氏

同　助手　安間拓己氏

大阪府柏原市教育委員会　北野　重氏にご指導いただきました。

また、神戸市理財局のご協力を得ました。

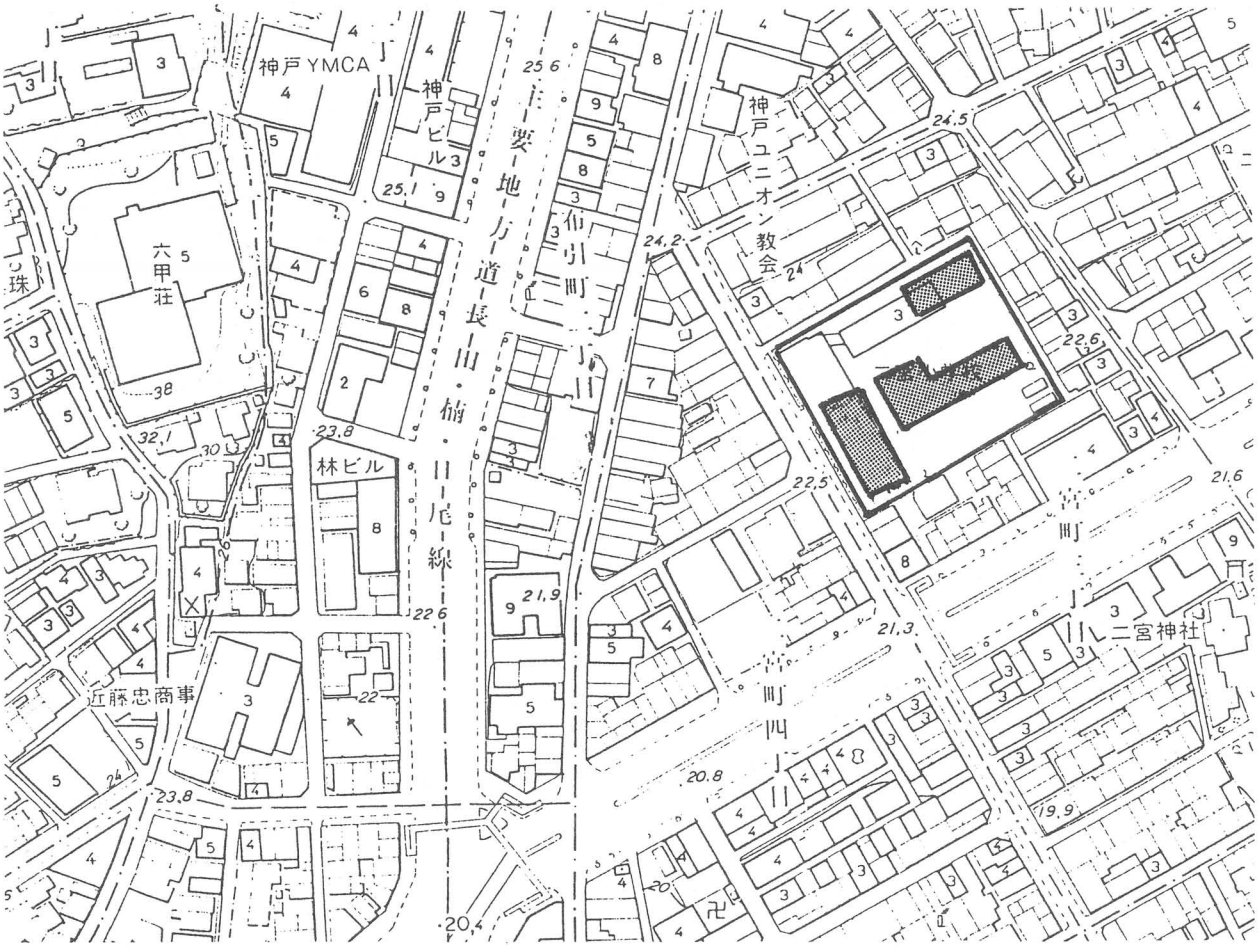
1．はじめに

中央区二宮町(にのみやちょう) 周辺は、これまで、遺跡の分布が明確でなかった場所です。このたび、二宮小学校跡地に共同住宅が建設されることとなり、試掘調査を行ったところ、土器片や柱のあとが発見されたため、平成10年８月31日より調査を行っています。

六甲山系の南麓には、中小の河川によって運ばれた土砂が堆積してできた扇状地(せんじょうち)が広がっています。そのなかでも、洪水で土砂がたまって形成される高まりを自然堤防(しぜんていぼう) といい、古くから人々はその周辺に居住してきました。

二宮遺跡の東を流れる現在の生田川は、明治初年に兵庫開港に伴い、現在の位置に付け換えられた人工の川です。もともとは、新神戸駅から西に流れ、二宮遺跡の西側を通り、JR三ノ宮駅、阪急三宮駅の前を抜けて、神戸市役所前のフラワーロードを流れていました。

二宮遺跡は、この旧生田川東岸の自然堤防上に営まれた村のひとつです。



今回の調査地の位置

2．周辺の遺跡　この付近で確認されている遺跡は、次のようなものがあります。

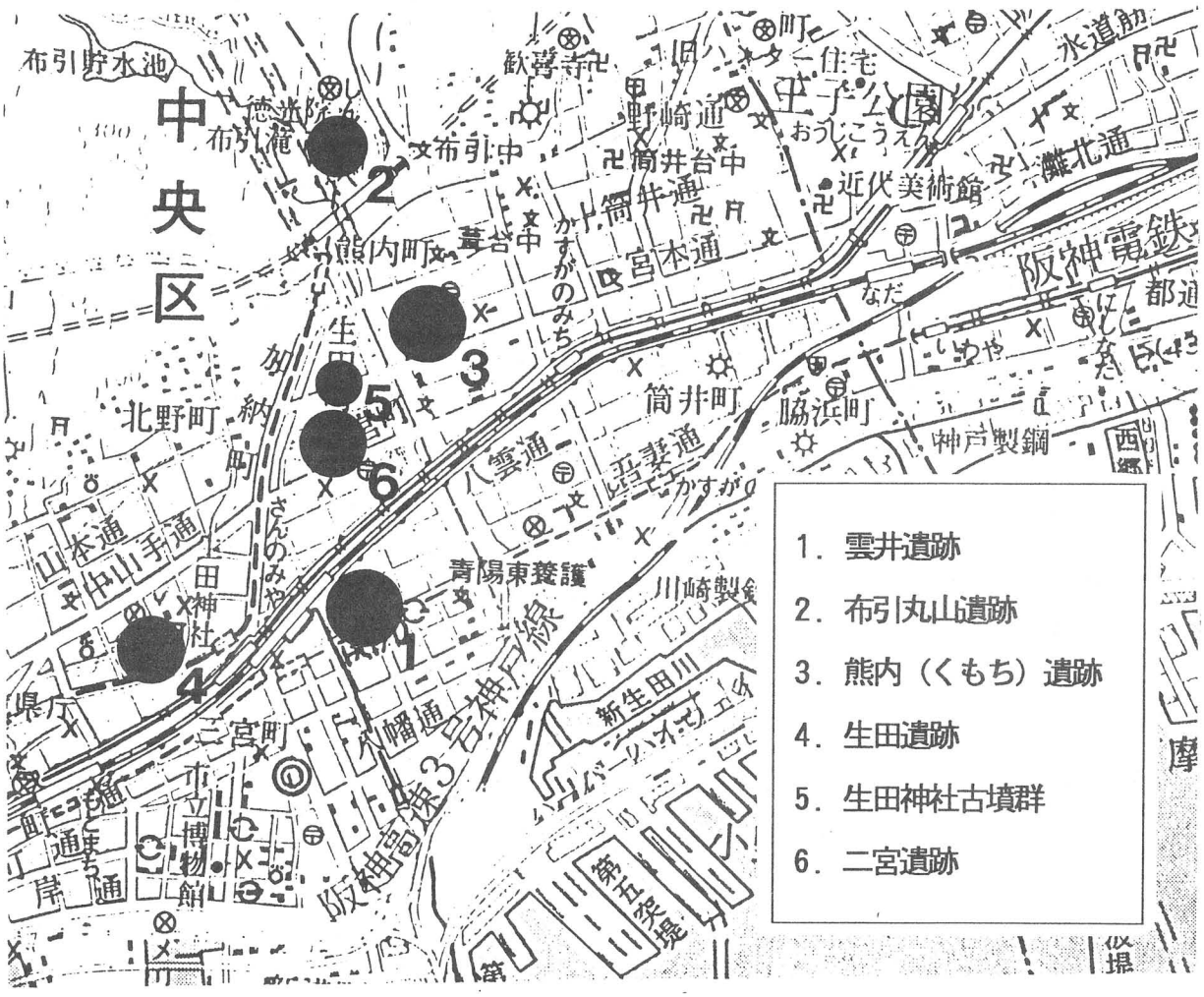
ＪＲ三ノ宮駅南側に拡がる雲井遺跡では、縄文時代早期(そうき)（約7000年前）～弥生時代中期（約2000年前）の村や墓のあとが発見されています。

また、新神戸駅の北側にある徳光院付近で、弥生時代中期の土器が出土しており、布引丸山遺跡とよばれています。この遺跡は、六甲山系南麓部の丘陵上に点在する高地性集落(こうちせいしゅうらく)の一つと考えられます。

新神戸駅の南側には、弥生時代後期～古墳時代初め（約1700年前）の住居あとが確認された熊内遺跡があります。

生田神社周辺には、古墳時代中期（約1600年前）の住居あとが見つかった生田遺跡があります。

また、今回の調査地付近に古墳が数基程度あったといわれていますが、現在はすがたをとどめていません。

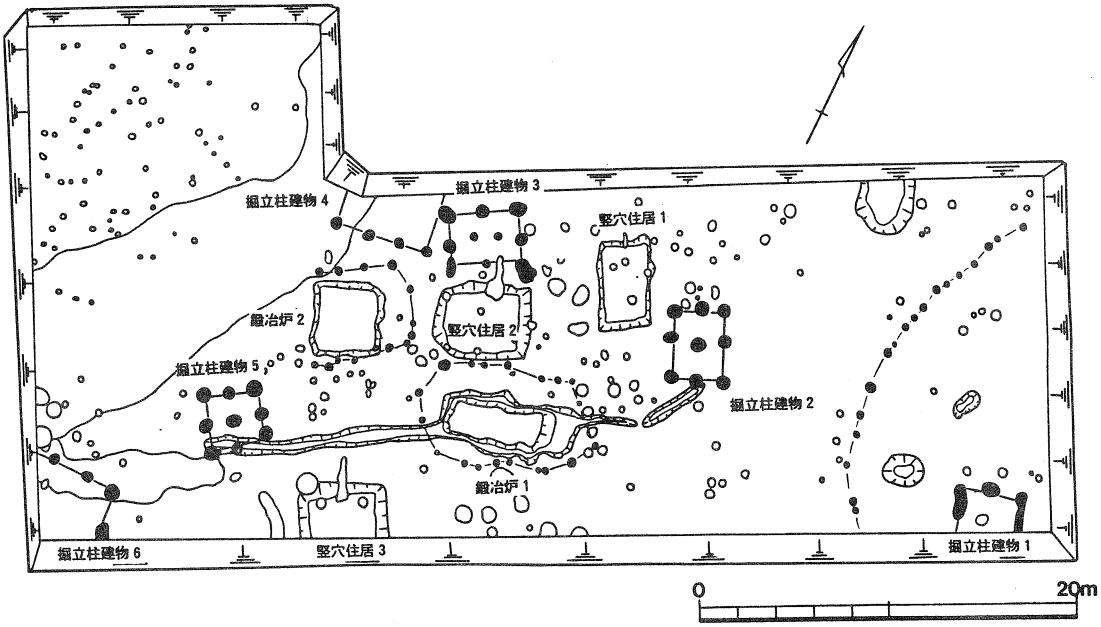


二宮遺跡周辺の遺跡分布図

3．今回の調査について　今回の調査では、弥生時代～鎌倉時代の遺物、遺構が発見されました。

作業のつごうで、調査区を、A～Cの3ヵ所に分け、調査を行いました。A，C区は、調査が完了後、埋めもどして、土置場となっているため、今回はご覧いただくことはできません。

このたび、公開しましたB区では、飛鳥(あすか) 時代（約1400年前）の人々が生活していた村の跡が、発見されました。



B区　平面図

①B区

飛鳥時代

B区では、掘立柱建物址、（ほったてばしらたてものし）6棟、竪穴住居址(たてあなじゅうきょし) 3棟、鍛冶炉址が2カ所、溝や柵列址が発見されました。

また、飛鳥時代をややさかのぼる古墳時代後期の滑石製の紡錘車(ぼうすいしゃ：糸を紡ぐ際に使うおもり)が当時の地面をおおう洪水砂中から出土しました。

竪穴住居址1

2.8 ×4.6 mの長方形の竪穴住居址で、西側の辺にかまどがありますが、煙出しの部分は削られています。南と北の床面に周壁溝(しゅうへきこう) という小さな溝が掘られています。これは、壁を伝って入ってくる雨水を処理する機能があります。

出土遺物から7世紀初めの住居址と判断されます。

竪穴住居址2

5×4mの長方形の竪穴住居址で、北側の辺にかまどがありますが、砂混じりの土で築いているために、かまどの形がはっきりしません。

竪穴住居址3　5×2m以上の方形または長方形の竪穴住居址で、北側の辺にかまどがあります。屋根を支える柱が2ヵ所確認されています。東側の床面に周壁溝が掘られています。

竪穴住居址2，3共に時期を決める出土遺物が少ないのですが、7世紀初めごろの住居と考えられます。

掘立柱建物址1　B区東端で発見された掘立柱建物址で、南北方向3間以上×東西方向2間の大きさで、柱を埋め込む穴が細長く掘ってあり、2本の柱を埋め込んで立てるようにしています。同様の建物址はA区で見つかっています。

土間のある建物が想定されます。

掘立柱建物址2　2間×2間の建物址で、柱の配置からみて、倉庫のような建物であった可能性があります。

南北棟であったと思われます。

掘立柱建物址3　2間×2間の建物址で中柱(なかばしら)が2本確認され、掘立柱建物址2とほぼ等しい面積があります。総柱(そうばしら)の建物であることから、倉庫のような建物が想定されます。

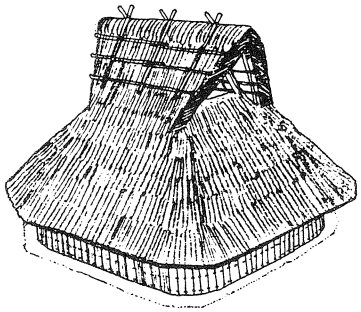
東西棟の可能性があります。

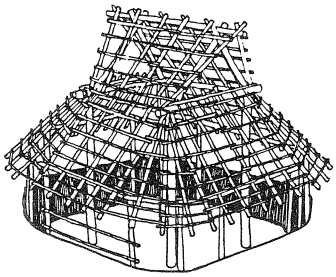
掘立柱建物址4　3間×2間以上の建物址で中柱がないため、床がなく、土間の建物が想定できます。

掘立柱建物址5　2間×2間の建物址で、柱の配置からみて掘立柱建物址2，3と同様の倉庫のような建物であった可能性があります。

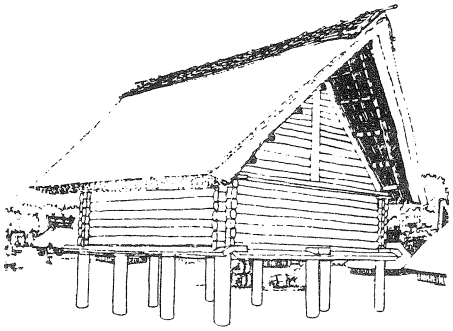
掘立柱建物址6　2間×2間の建物址で、柱の配置からみて、土間の建物であった可能性があります。

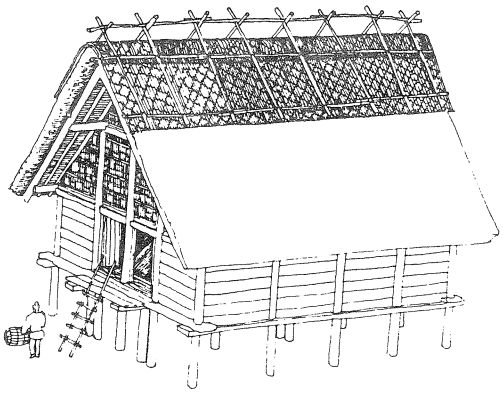
掘立柱建物址の時期は、7世紀前半頃と考えられます。





竪穴住居の復元例

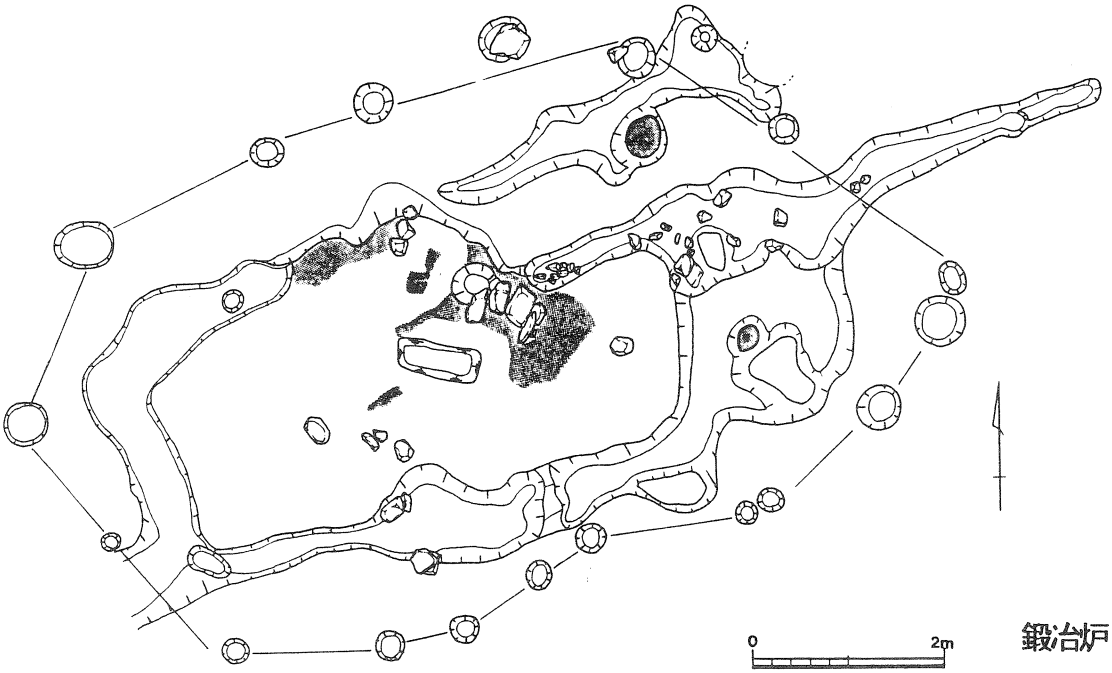




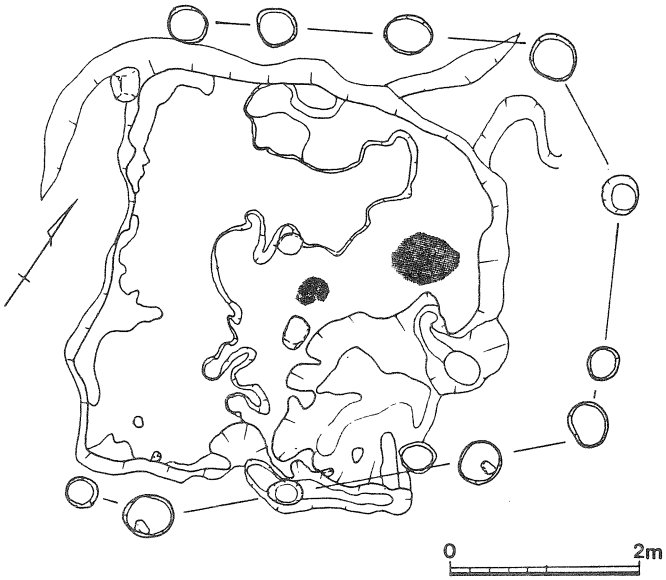
掘立柱建物の復元例

鬼頭　清明著

『古代日本を発掘する第6巻・古代の村』（岩波書店）より



鍛冶炉１　平面図



鍛冶炉２　平面図

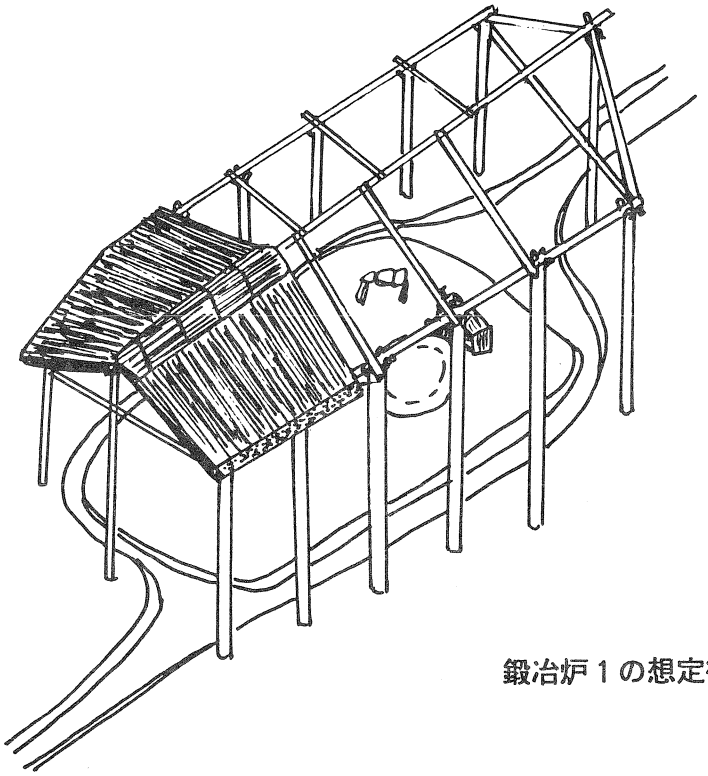
鍛冶炉址　　B区の中央部には、焼けた粘土や炭が集中して発見される場所が点在しています。付近からは、鉄の道具を製作する時にできる鉄滓(てっさい:かなくそ)や砥石(といし)、鉄製品が発見されました。これらから、判断して鉄の製品を製造、修理する鍛冶工房があったことがうかがえます。

鍛冶炉自体は壊れているため、構造ははっきりと判らないのですが、砂地の地面の上に粘土をはって炉の底面とするか、あるいは地面をわずかに掘りくぼめて炉としているようです。また、作業の際に用いたと思われる石囲いの一部が残されているところもあります。

炉の周辺には、炭とさびた鉄粉が混じったような黒褐色土が広がっており、製品を鍛造(たんぞう:金属片を金槌などでたたいて成形していくこと)したあとがありました。

鍛冶炉址1　鍛冶炉址１では、溝がほぼ前周する内側に炉が設けられており、その周りからは柱を立てた穴が発見されました。このことから、雨水などの湿気が炉にあたらないように溝を周囲に掘り、柱を立てて屋根を葺いた建物があったと想定されます。

これに近い例は大阪府柏原市大県(おおがた)遺跡で発見されています。



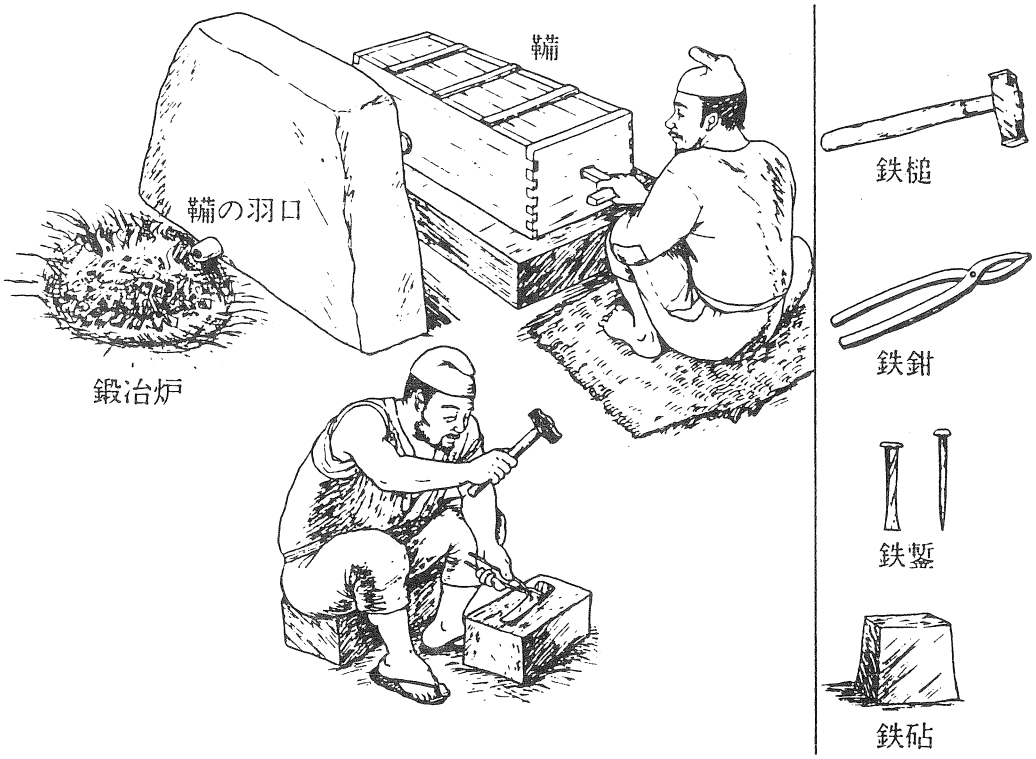
鍛冶炉１の想定復元図

鍛冶炉址2　鍛冶炉址２では、３×３ｍほどの範囲の砂の地面に粘質土を貼り、作業面を造っています。この面には、炉の痕跡と思われる赤く焼けた土や炭が入りこんでいました。また、その周りには、柱を立てた穴が取りまくことが判りました。これから、柱を立てて屋根を葺いたものと想定されます。

今回の調査で出土した鉄製品は、鋤先(すきさき)、鎌(かま)、刀子(とうす:小刀)、釘(くぎ)、鎹(かすがい)などの農工具や武器である鏃(やじり) が現在のところ確認されています。

さて、当時の鉄製品製作は、①当時の役所的な機関に付属して、大規模な鍛冶を行う専業工房（鉄以外の金属加工を含む）と②地方豪族の下で周辺の村々の需要をまかなう程度の中規模の生産、補修を行う工房、③村単位で、鉄の道具の修理や簡単な製品の製作にあたる集団に分かれていたようです。

この遺跡で発見された鍛冶炉址や鉄製品からみて、②の人々が居住していたと考えられます。



鍛冶炉１・２　平面図　鍛冶作業の様子　発掘調査箇所の全体図
潮見　浩著『技術の考古学』（有斐閣）より

柵　列　鍛冶炉址や住居址，建物址が集中する部分の東には、遺構のまばらな空白地はさんで、円弧をえがく一重の柵列が並び、その中に掘立柱建物址１が建てられています。西側の鍛冶炉址や住居などと柵で区切る意味は不明です。

奈良時代　飛鳥時代の洪水によって、運ばれてきた砂を少し掘りこんで、土器が埋められていました。そこには、土師器(はじき・低い温度で焼いた赤，褐色の焼き物)の皿が５枚と須恵器(すえき：窯をつかって高い温度で焼いた青灰色の焼き物）の坏蓋(つきぶた：お椀のふた)が２枚収められています。

なぜ、埋められたかは判りませんが、ひとつの考えとしては、ふたたび川が氾濫して、村を襲わないように川の神様にお祈りをしたまじないの跡という考え方ができます。

Ｂ区の中央付近では、くぼ地に、生活で不要になった土器を大量に捨てているのが見つかりました。

Ｂ区、Ｃ区からは、土馬(どば・まじないに使われた土製の馬形）がばらばらに割られた状態で出土し、それぞれの破片が接合しました。

平安～鎌倉時代　中央部で、東西方向７間、南北方向４間の掘立柱建物址が１棟、発見されました。５×２間の母屋(もや)部分に各１間ずつ張り出した庇(ひさし）を持ち、入母屋造(いりもやづくり）の可能性が高い建物です。

Ａ区でも同時代の建物址が発見されていますが、建物の主軸方向が異なっており、同じ時期に建っていなかったのかもしれません。

②A，C区　　A，C区は調査が完了し、埋め戻されていますので、ご覧いただけません。調査の成果の概要は、以下のとおりです。

A　区　　竪穴住居址（たてあなじゅうきょし）２棟、掘立柱建物址（ほったてばしらたてものし）２棟、鍛冶遺構（かじいこう）が４～５カ所発見されました。

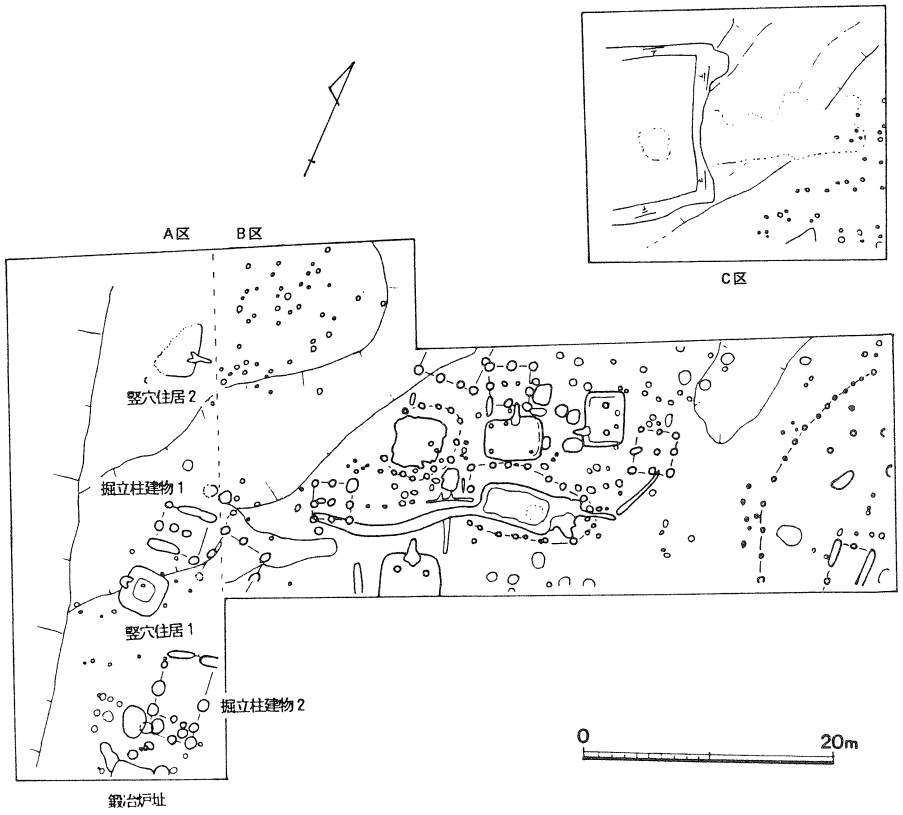
飛鳥時代

竪穴住居址　　竪穴住居址は一辺 3.5m（竪穴住居址1），推定約５m（竪穴住居址2）の方形または長方形の大きさで、いずれもかまどを粘土で造りつけています。竪穴住居址１は、周囲にベッド状の高まりがあります。屋根を支える柱の配置は不明です。いずれの住居址からも、７世紀初めの土器が発見されています。

掘立柱建物址　　南北方向２間×東西方向２間（掘立柱建物址1）と南北方向４間×東西方向３間以上（掘立柱建物址2）の建物址が確認されました。

掘立柱建物址１は、柱を埋め込む穴が細長く掘ってあり、２本の柱を埋め込んで立てるようにしているのが特徴です。

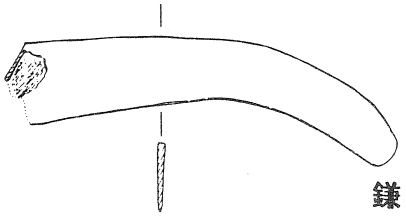
掘立柱建物址２は、南側に庇（ひさし）を持ち、中柱がない構造からみて、土間の建物であったと推定されます。この建物が無くなったあとに、鍛冶炉が造られたようです。

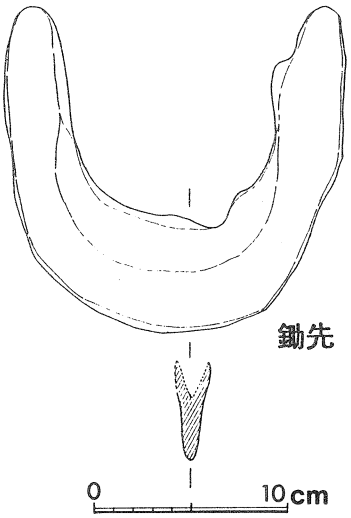


調査区全体図

鍛冶炉址　焼けた土や炭が詰まった浅い穴が南端部で4～5カ所発見されました。浅く地面を掘りくぼめた中に赤く焼けた土や炭などが発見されています。B区の鍛冶炉のように、屋根を葺いたり、溝を巡らせた痕跡が認められないことから、屋外の鍛冶炉の可能性があります。

炉址の周辺からは、鎌(かま)の刃、刀子(とうす)、釘(くぎ)、鎹(かすがい)、U字型鋤先(すきさき)などの鉄製品が出土しました。





鉄製品実測図

奈良時代　飛鳥時代の村を埋める洪水砂から、甕(かめ・鉢を敲きするうつわ)が完全な形で発見されました。まじないのために埋められたと推定されます。

平安～鎌倉時代　南端部で、2×2間の掘立柱建物址が1棟確認されました。奈良～鎌倉時代の堆積層は、小学校校舎の基礎で破壊されており、残されている部分はわずかでした。

掘立柱建物址

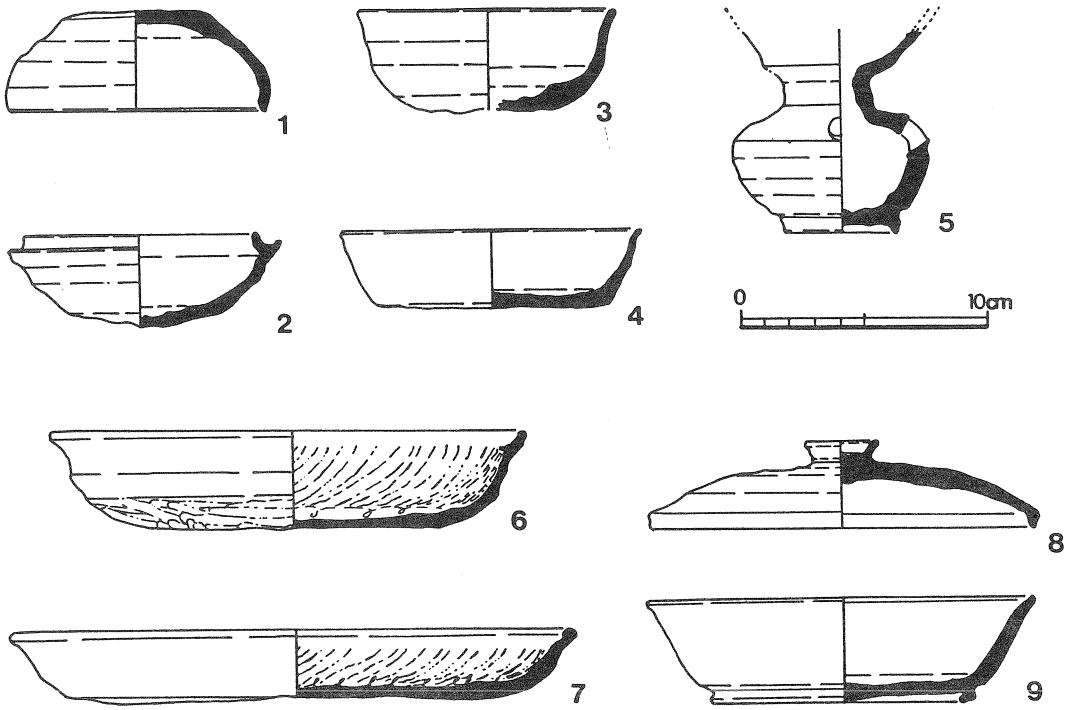
C　区　大雨が降った時にだけ、水が流れる

飛鳥～奈良時代　**ような浅い小川状のくぼみが南北方向**にのびています。

飛鳥時代には北から南西よりに流れていたものが、洪水で土砂が大量にたまった後は、流れの向きを南に変え、B区の中央付近にある奈良時代の土器を大量に捨てているくぼ地につながるようです。

また、奈良時代にはその小川に直交して拳大～人頭大の石を積んで堤(つつみ)状のものを造っていますが、その目的はよく判りません。また、C区に掘られた穴からは、当時の役人が身につけた革帯（ベルト）の銅製帯金具(ぬかなぐ)が出土しています。

平安～鎌倉時代　平安～鎌倉時代は耕作地となっていたようです。前の時代からあった小川状のくぼみは、幅を狭めながらも江戸～明治時代頃まで用水路として残っていたようです。



出土土器実測図

4．まとめ　今回の調査でわかったことは、以下の通りです。

① 弥生時代～古墳時代中頃（約1800～1600年前）

A，C区の調査の結果、この周辺は、旧生田川の氾濫（はんらん）により、大きな石とともに弥生時代～古墳時代中頃の土器が流されてきて堆積しており、当時は洪水の影響を受けやすい不安定な土地であったことがうかがえます。

②飛鳥(あすか) 時代（約1400年前）

土石流の堆積でできた自然堤防上に村ができます。今回の調査では、A～C区で竪穴住居址５棟、掘立柱建物址８棟、鍛冶炉址が発見されました。

鍛冶炉址には、鍛冶炉専用の小屋と排水施設を持っているものもあることから、竪穴住居や掘立柱建物などの住居内で行う小規模な鍛冶工房でなく、ある程度専業化された集団が鉄製品の生産を行っていたと推定されます。

たとえば、地方豪族の下で周辺の村々の需要をまかなう程度の生産、補修を行う工房という位置ずけができます。

周辺で発見された住居や建物址は、生産に従事した工人とその家族の住居や倉庫などと考えられます。

しかし、この村の一部は旧生田川の氾濫による洪水に襲われ、埋没します。

③奈良時代（約1300年前）

洪水によって運ばれてきた砂に覆われた上には、住居は再建されず、まじないで供えられた土器や土馬が出土しました。

また、くぼ地に生活で不要になった土器を大量に捨てているのが見つかったり、石を積み上げて堤状のものを造っています。

なお、この時期の村の中心は、調査地の東側と推定されます。

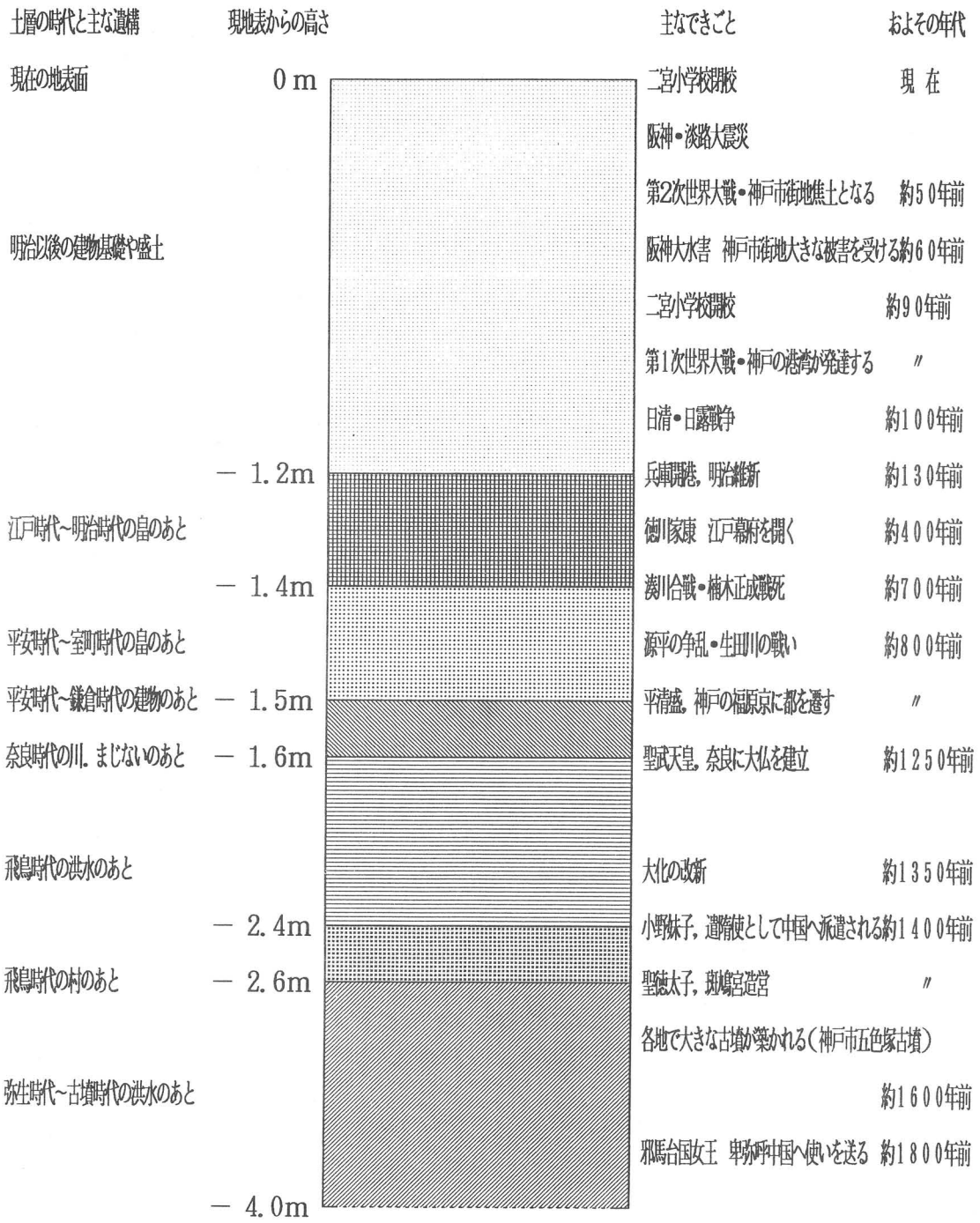
④平安～鎌倉・室町時代（1200～ 500年前）

調査地付近は、基本的には耕作地として利用されているようですが、掘立柱建物址２棟が発見されていることから、時代によっては、部分的に屋敷地として利用されているようです。

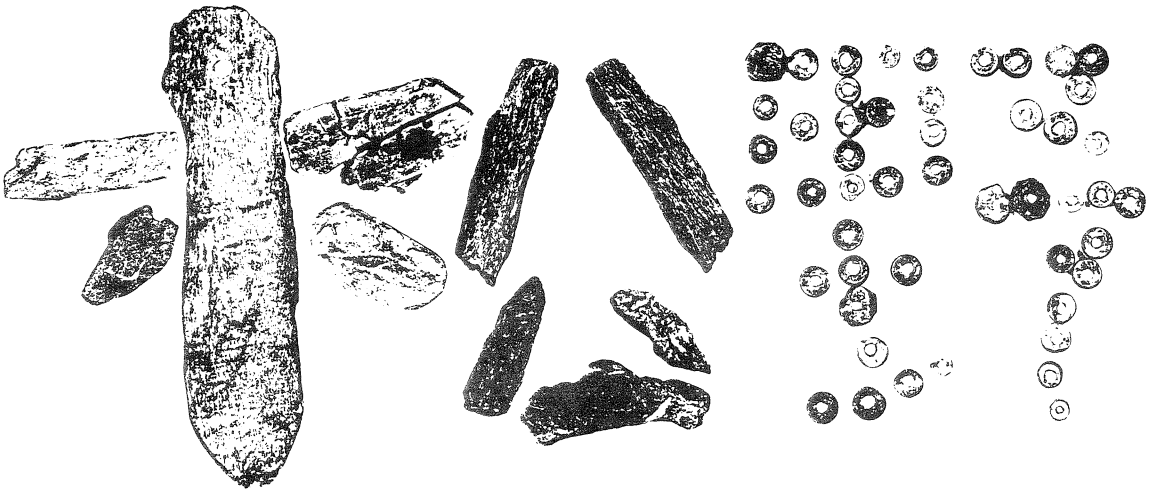
このように、二宮町のあたりでは、約1400年前の飛鳥時代から人々が生田川の洪水に悩まされながらも、この地に暮らし、耕してきたことが判りました。

『日本書紀』（にほんしょき）という古い書物の神功皇后（じんぐうこうごう）の部分に、生田神社の祭神が「活田長峡国」（いくたながおのくに）に鎮座したいというお告げをしたという記述があります。この時に祭られた場所が新神戸駅の北側にある布引丸山（砂山・いさごやま）であるという言い伝えが残されています。「活田長峡国」の実態は不明ですが、この小山から見おろすことのできる、旧生田川両岸の自然堤防上に沿って営まれた村むらのことを示しているのかもしれません。

二宮遺跡の堆積土の状況と略年表

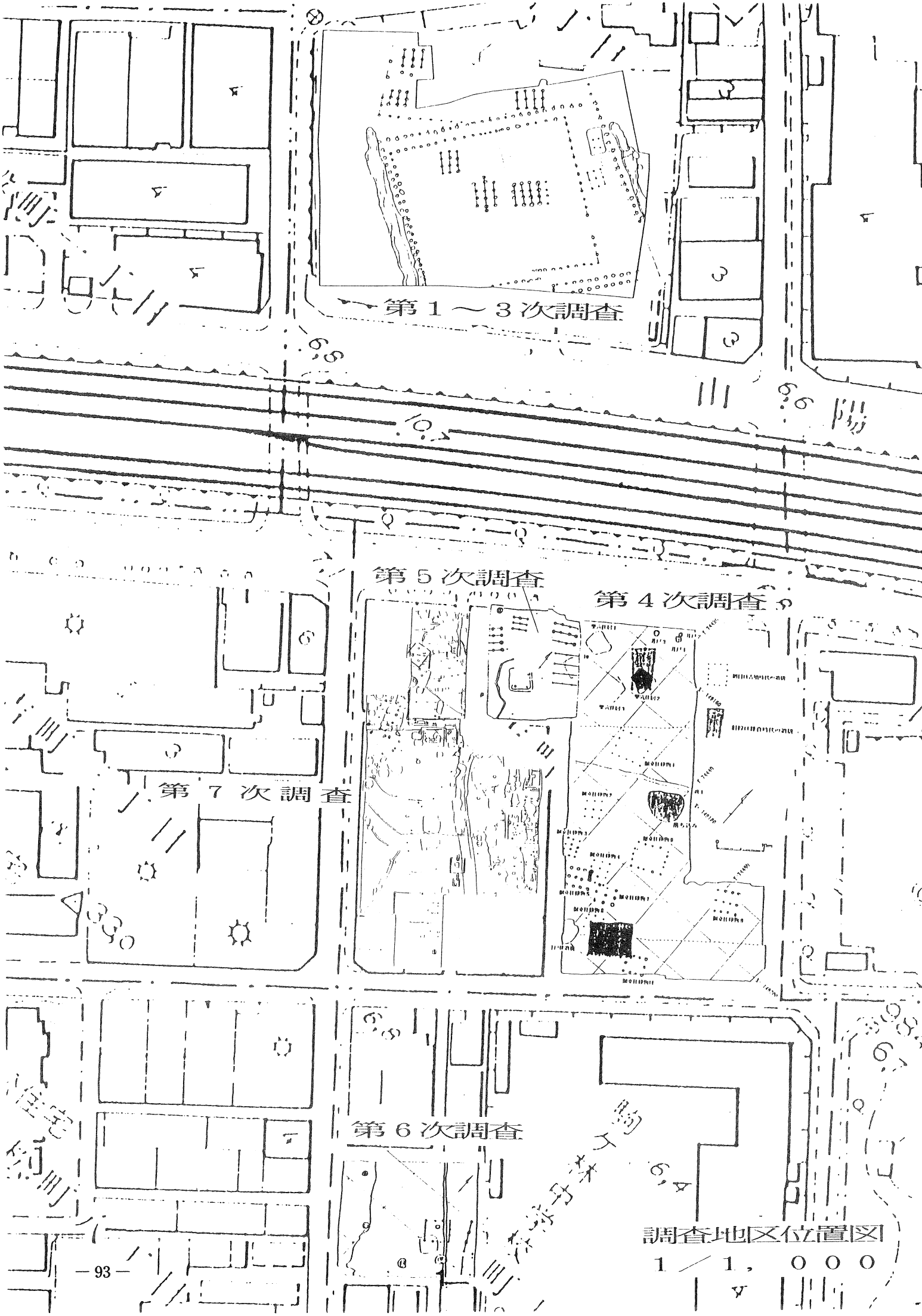


松野遺跡 地元説明会資料

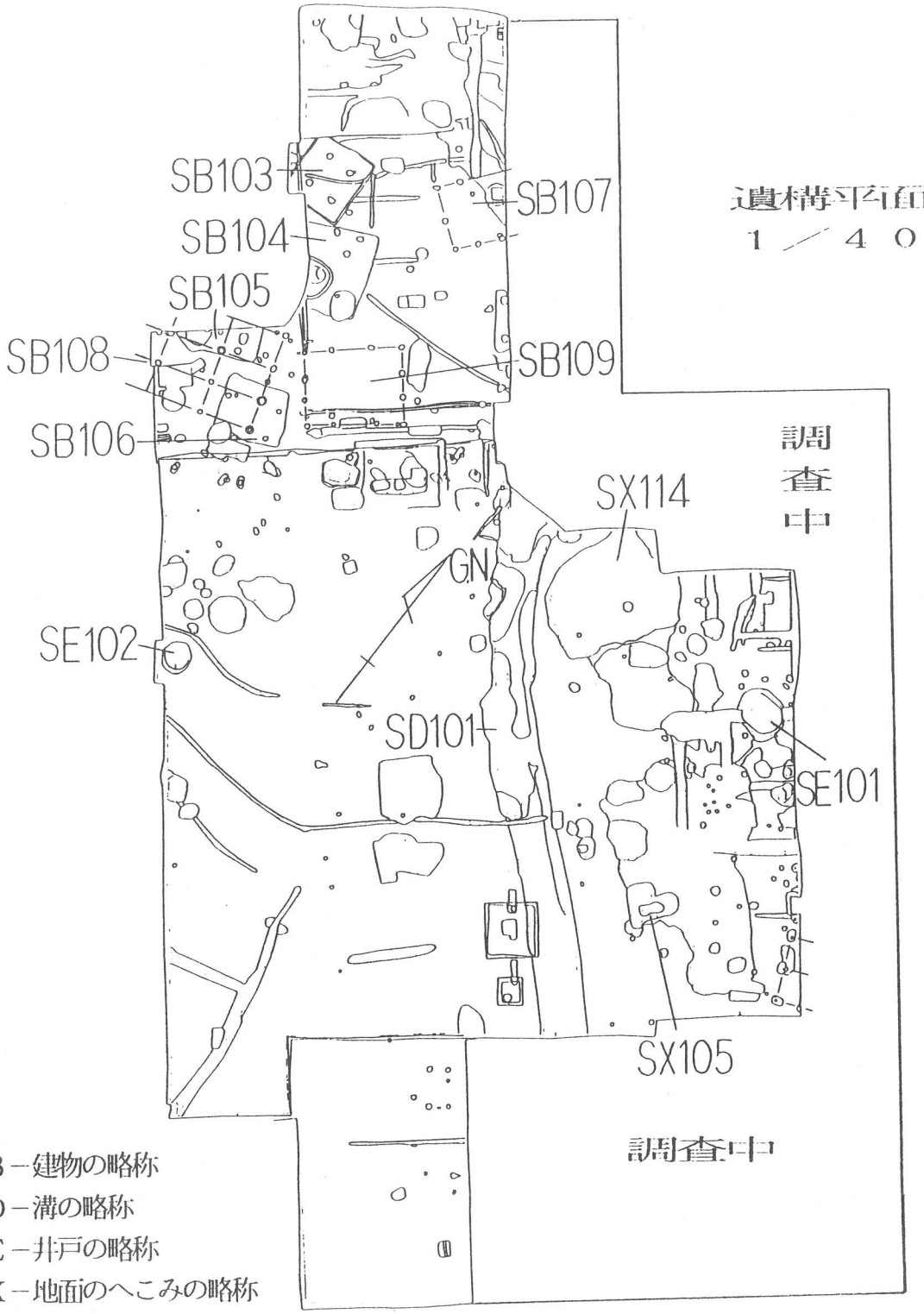


１９９９．３．１３

神戸市教育委員会



調査地区位置図
１／１，０００



ＳＢ－建物の略称
ＳＤ－溝の略称
ＳＥ－井戸の略称
ＳＸ－地面のへこみの略称

松野遺跡は、昭和56年に当調査地点のＪＲの線路をはさんだ、北側の松野住宅の建設にともなって、発見され地名から松野遺跡と名づけられました。

今回の調査は、震災復興の再開発事業による住宅建設に先立って、平成８年度から埋蔵文化財の発掘調査をおこなっています。

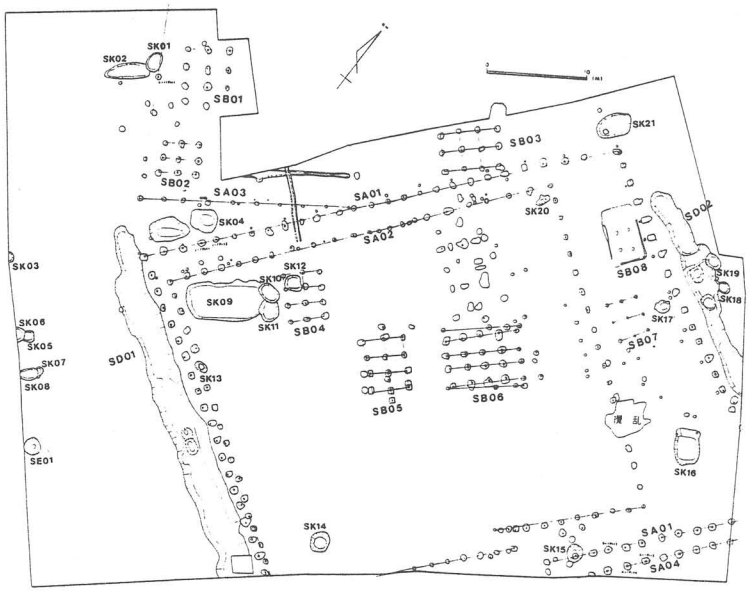
今回の調査であきらかになったこと

今回の調査であきらかになったことは、昭和56年におこなわれた発掘調査地（第１次調査）から今回の調査地のまで、遺跡がひろがっているということです。

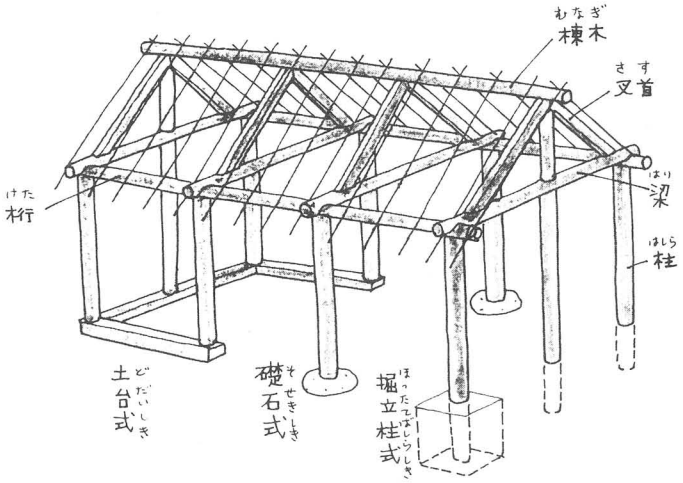
第１次調査では、柵（さく）と濠（ほり）にかこまれた古墳時代の豪族の居館（きょかん）が発見されました。今回の調査では、これと同じような時代の掘立柱建物（ほったてばしらたてもの　）や竪穴住居址（たてあなじゅうきょし）などが見つかりました。また井戸や溝（みぞ）　なども見つかり、当時の「むら」であることがわかりました。

今回の調査の南東部では、数多くの石製品が出土しました。石製品は当時の祭りやまじないをおこなったときに用いられたものと考えられます。当時の「むら」がどのような生活をしていたのかを考えための重要な資料となります。

また鎌倉時代ころの掘立柱建物や井戸も見つかり、鎌倉時代ころの「むら」であったこともわかりました。さらに遺構面（いこうめん）の砂層からは縄文時代晩期の縄文土器が少し出土しています。

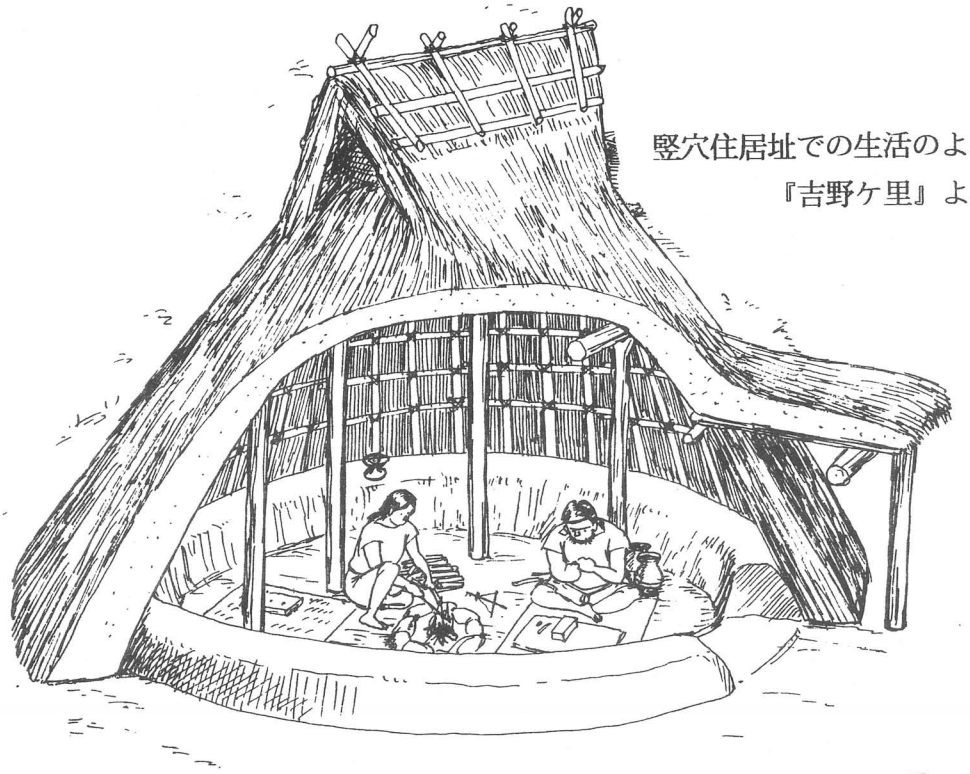


柵（さく）と濠（ほり）に囲まれた建物群
松野遺跡第１次調査
（長田区松野通）



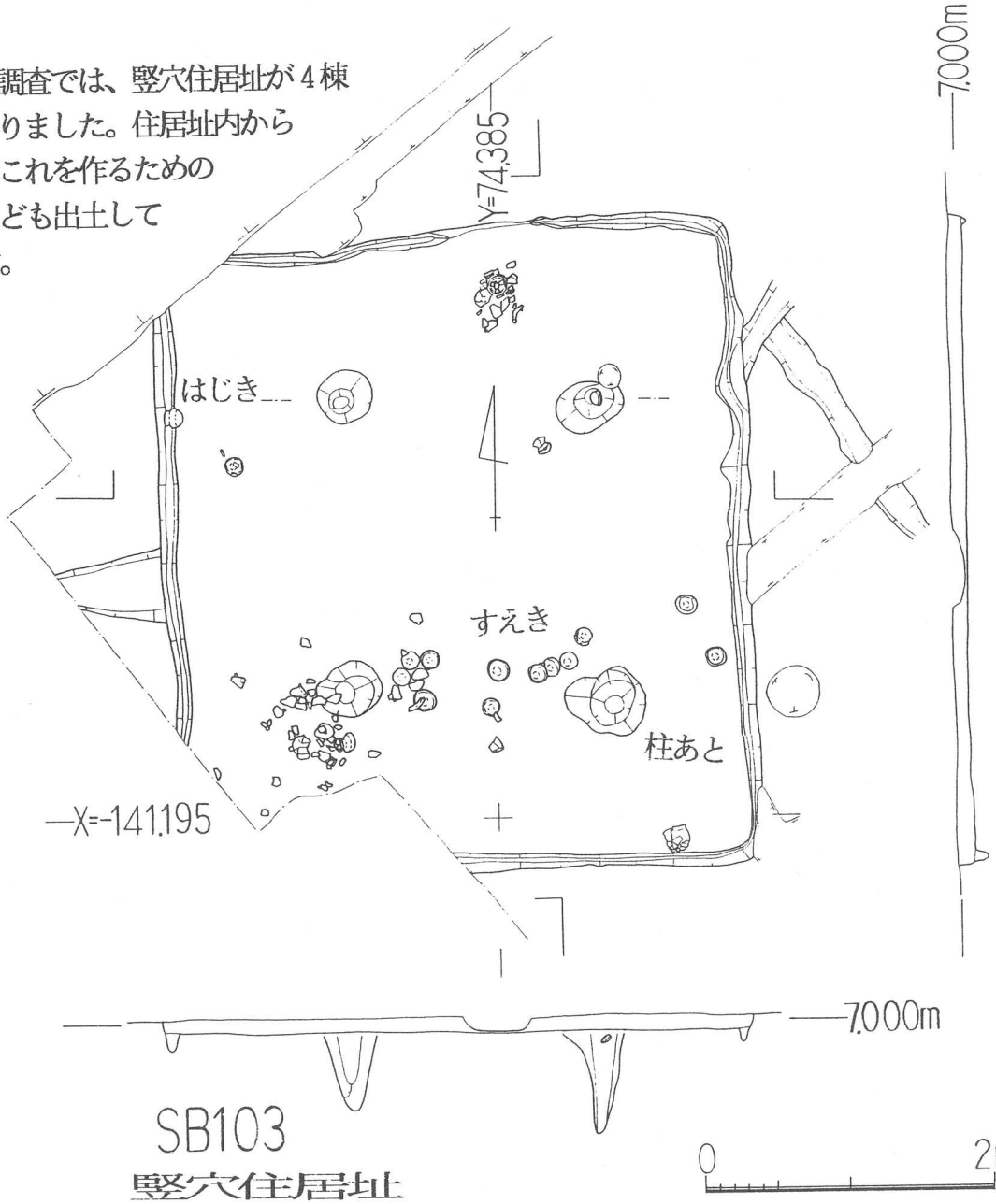
今回の調査では、掘立柱建物が４棟見つかりました。古墳時代の建物が３棟です。掘立柱建物の規模は、縦方向と横方向の柱と柱の間を数えてあらわします。
となりの絵は２間（けん）かける３間の建物です。
図が小さいですが２ページの建物の規模を数えてみてください。

宮本長二郎・穂積和夫「平城京」より



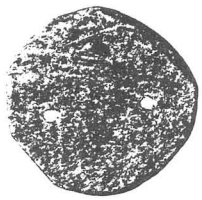
竪穴住居址での生活のようす
『吉野ケ里』より

今回の調査では、竪穴住居址が４棟見つかりました。住居址内から臼玉やこれを作るための原石なども出土しています。



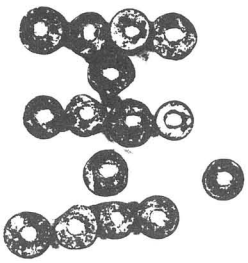
SB103
竪穴住居址
平面及び断面図

石製品の種類



双孔円盤
そうこうえんばん

勾玉模造品
まがたまもぞうひん



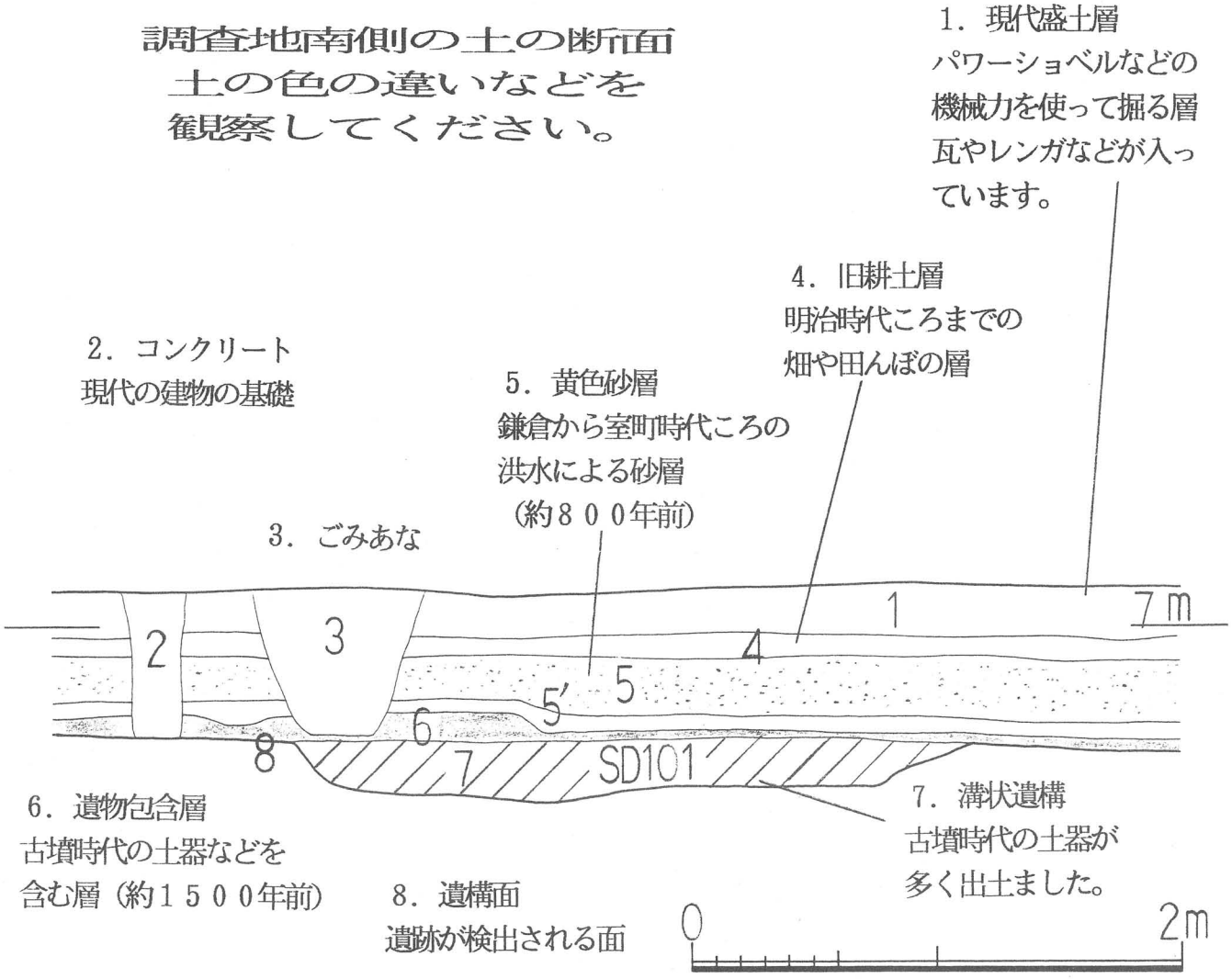
臼玉
うすだま
現在で合計約１８００個
見つかっています。

剣型石製品
けんがたせきせいひん

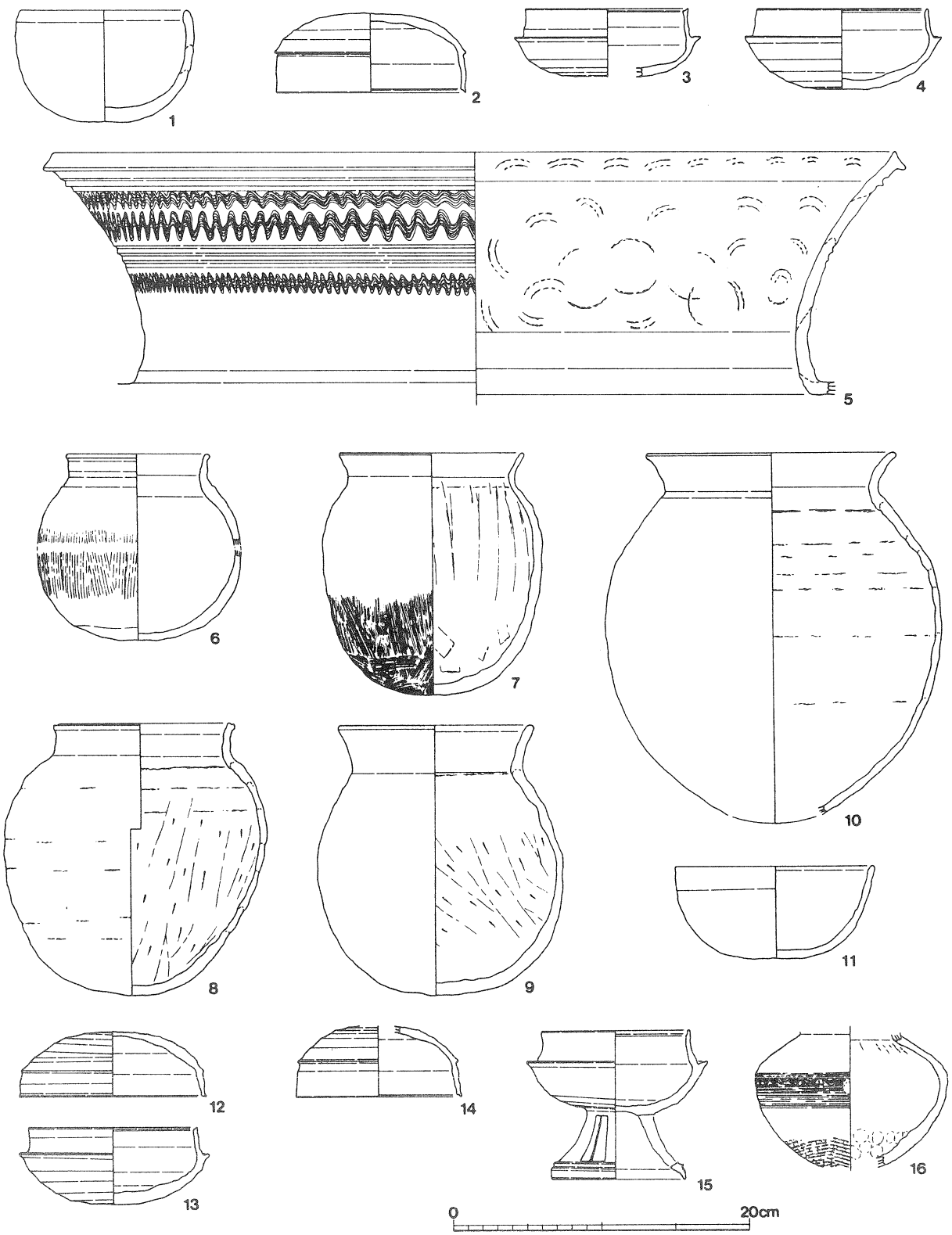
古墳時代とは？

古墳時代は、今から約１７００年から１４００年ほど前の時代です。今回の調査で見つかった建物や溝は、約１５００年ほど前の古墳時代後期初めころの時代にあたります。古墳時代は、古墳が数多くつくられた時代という意味です。

古墳時代には、中国大陸などからいろいろな技術がつたわってきました。新しい土木技術を使って古墳をつくったり、今回の調査で見つかった須恵器（すえき）なども専門の知識をもった人々が、窯（かま）を築いて焼いた製品です。



南壁断面実測図



1・11土師器椀（はじきわん）．2・12・14須恵器坏蓋（すえきつきぶた）
3・4・13須恵器坏身（すえきつきみ）．5須恵器甕（すえきかめ）
6土師器壺（はじきつぼ）．7～10土師器甕（はじきかめ）．
15須恵器高坏（すえきたかつき）．16須恵器鼎（すえきはぞう）

ＳＥ１０２（井戸）出土土器

6

展示会・見学会資料

平成９年度

淡河町内遺跡展示会

展示解説

本日はお忙しい中、淡河町地域福祉センターに足を運んでいただきまして、あり難うございます。

ここに展示しましたのは、町内で出土した古い時代の遺物です。以前ここでセンター開設１周年を記念して、同様の展示を行いました。今回は、この時に展示できなかったものを中心に、皆様に見ていただきたく準備しました。

遺跡の概略は、パネルを見ていただくとして以下、個々の遺物の簡単な説明をさせていただきます。

有茎尖頭器（ゆうけいせんとうき）

人々がまだ、狩猟や採集の生活を送っていた頃の、槍先または鏃（やじり）と考えられているものです。これは長さが４㎝しかなく、恐らく鏃と思われます。有茎尖頭器はこの北区では、長尾町や山田町で出土していますが、決して数多く見つかっているものではありません。今から約１万年前と考えられる最古の淡河町民の残したものです。

縄紋土器（じょうもんどき）

縄紋土器は、形や紋様の変化をとらえて早期・前期・中期・後期・晩期の５時期に分けられています。有茎尖頭器はこの内、早期に属すものです。縄紋時代の最後はすなわち「弥生時代の開始」となりますが、弥生時代の始まりは今から約２５００年前と考えられます。

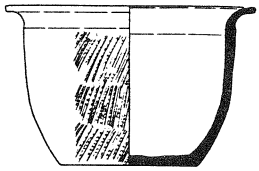
ここにありますのは、縄紋時代でも「後期」のものです。後期の縄紋土器はご覧のように口の縁に近いところに紋様を集中させるのが１つの特徴です。

韓式系土器（かんしきけいどき）

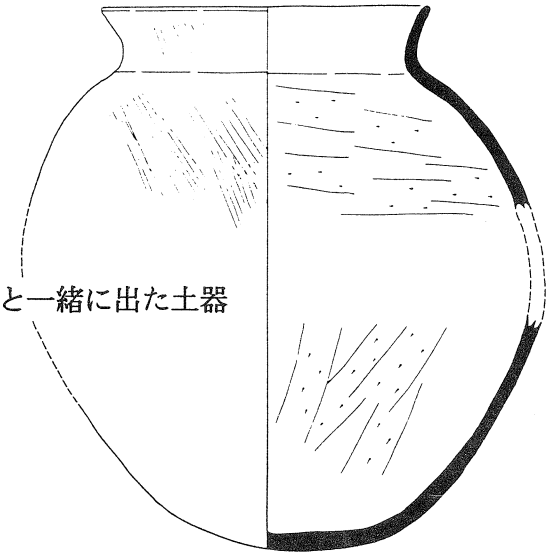
中村遺跡で古墳時代の住居を調査していた時、変わった形の土器が見つかりました。それは小さな鉢形のもので、当時の土器が丸底であるのに対し、平底をしていました。

これは、韓式系土器と呼ばれるもので、朝鮮半島南部の遺跡でよく発掘されるものです。神戸市でも海沿いの遺跡で出ることはありましたが、内陸部からの出土は初めてのことです。

この土器は小さいながらも、当時の朝鮮半島との何らかの交流という大きな話題を提供してくれる貴重な遺物です。



中村遺跡出土韓式系土器　S＝1：4



韓式系土器と一緒に出た土器

須恵器（すえき）

平成９年12月に現地で説明会を行いました勝雄遺跡で出土したものです。

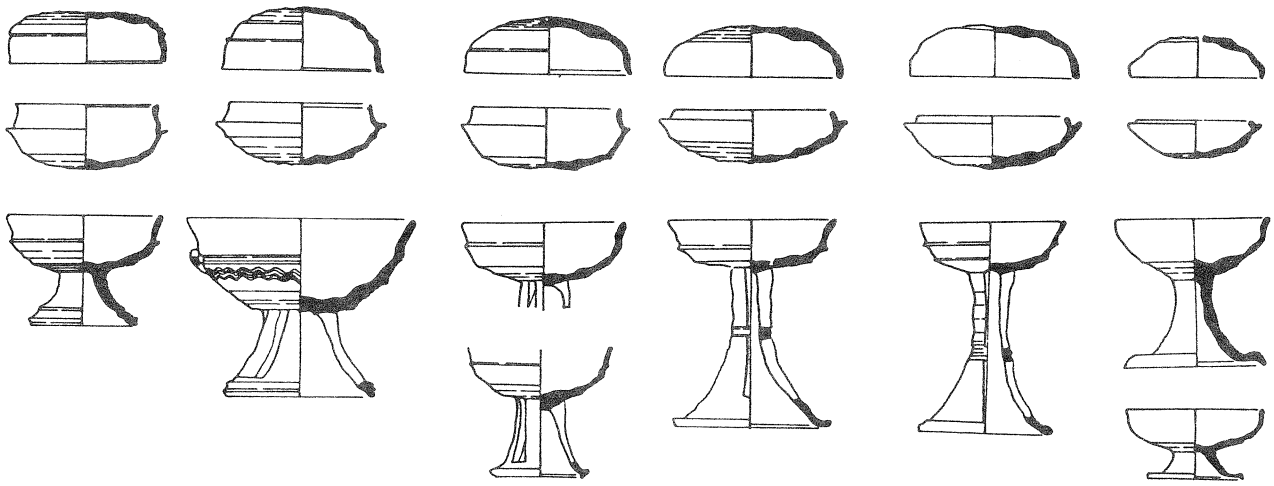
須恵器とは、登り窯で焼いた灰色をした堅い陶器のことを言います。古墳時代でも前期、今から約１６００年前までは、素焼きの土器を使っていましたが、その後、古墳時代中期になって朝鮮半島から窯で焼く技術を持った人々が来て作り始めたのが須恵器です。

ここにある須恵器は飛鳥時代、西暦で言うと６００年～６５０年頃のものです。

ところで、この須恵器がなぜ西暦６００年～６５０年頃のものと言えるのか不思議に思われたことはないでしょうか。

私たちは、土器を扱う場合「同じ形のものは、同じ時代に作られたもの」という事を前提とします。ですから、勝雄遺跡の須恵器の時代を考える時には、これと同じ形のものがどこで出土しているかを調べることから始めます。

奈良県に牧野（ばくや）古墳という円墳がありますが、この古墳は７世紀初め頃に亡くなったと古い記録から推定される「押坂彦人大兄皇子（おしさかひこひとのおおえのおうじ）」の墓である可能性が高いものと考えられています。この古墳から出土した須恵器と勝雄遺跡で出た飛鳥時代の須恵器でもやや古いタイプはよく似ています。



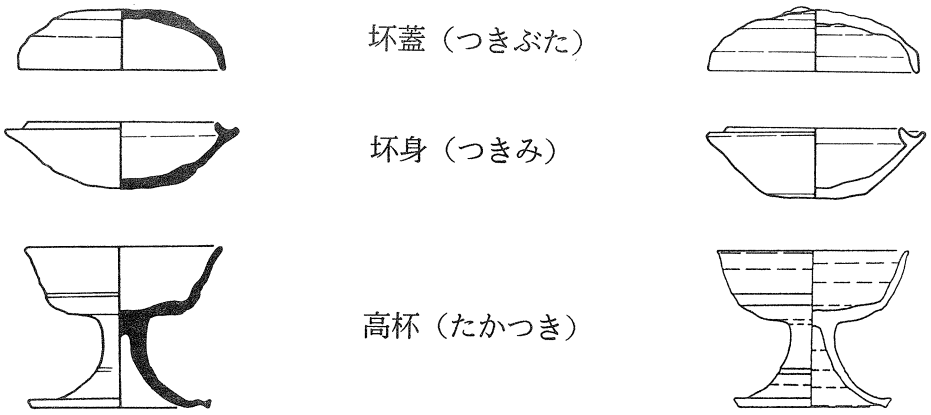
５世紀の須恵器　　６世紀の須恵器　　７世紀の須恵器

須恵器の形の変化

京都の宇治市に隼上り窯（はやあがりよう）という登り窯があります。ここでは須恵器と共に瓦も焼いていましたが、この瓦は飛鳥の蘇我氏本宗家の氏寺「豊浦寺（とゆらでら）」に運ばれていました。隼上り窯は蘇我氏御用達の窯とみて良いでしょう。蘇我氏本宗家は有名な大化の改新で滅亡するのですから、隼上り窯も操業を中止するのは西暦６４５年頃ということになります。ここで終わり頃に焼かれた須恵器は、勝雄遺跡から出土する飛鳥時代の須恵器でもやや新しいタイプの須恵器とよく似ているのです。

勝雄遺跡出土の須恵器が西暦６００年～６５０年頃と考えるのは以上の理由からです。

私達が、この土器は何年ぐらい前だとか言っているのも、あてずっぽうばかりではないことがお分かりいただけましたでしょうか。



隼上り窯出土須恵器　Ｓ＝１：４　　勝雄遺跡出土須恵器　Ｓ＝１：４

刀子・火打金（とうす・ひうちがね）

木津遺跡で見つかったお墓には、長さ約31cmの短い刀（刀子）と、火をおこす道具の火打金、そして中国で作られた青磁の碗が供えられていました。

ここに葬られた人はどのような人だったのでしょう。刀や中国から輸入された青磁碗を持っていたことから、ある程度身分のある人と想像するのも一案です。

しかし、短い刀を持つ人は、平安時代～室町時代に描かれた絵巻物のなかに沢山見られます。絵巻物のなかの人物の身分を特定するのは大変困難なことですが、寺の坊主、杣人（そまうど、材木の伐採の仕事をするひと）大工、馬子や農民など一般庶民に至るまで腰に刀を差していたことが窺えます（パネルを見てください。）

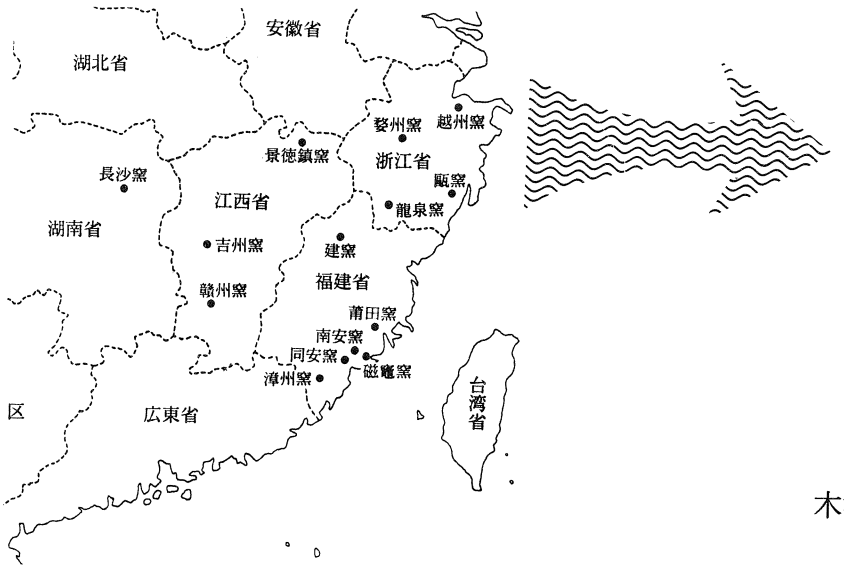
中世の人々にとって、刀を腰に差すことは実用の目的もあったでしょうが、頭に烏帽子（えぼし）を被るのと同じぐらい、現代の女子高生が足にルーズソックスを履き、片手に携帯電話を握ると同じぐらい、ある種の「作法」・「流行」であったのかもしれないのです。

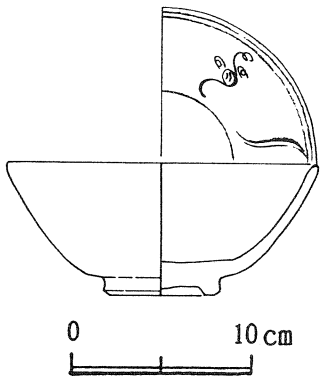
青磁碗（せいじわん）

平安時代の終わり頃から日本は、中国と盛んに貿易をおこない様々なものを輸入します。一般的には12世紀～13世紀以降、このような青磁・白磁が多量に輸入され、庶民が使う日常の食器にも中国製磁器の占める割合が高くなると言われています。

しかし、実態はまだ不明瞭な点が多く、日本中、すべて均等に中国製磁器が普及していったのかは疑問のあるところです。

この問題を解決するには、遺跡から出土する磁器の破片を一つずつ数えて、他の日常容器との割合を調べるしか手はありません。このような気の遠くなるような作業を通じて、磁器類がどのように普及していったか、ひいては木津の墓に葬られた人がどのようなひとであったのかが言えるようになるのです。





木津遺跡出土　龍泉窯系青磁碗

青磁・白磁破片（せいじ・はくじはへん）

淡河町で発掘して出た遺物は、全て埋蔵文化財センターに持って帰っています。磁器の破片についても同じで、これは今言ったことを調べるのを１つの目的としているからです。

これらの破片は当然のことながら、元々は完全な形であったものです。私達は、破片を見て頭の中で完全な姿の碗を思い浮かべます。同じように想像した上で、皆様はこれらの破片が多いと思われるでしょうか、案外少ないものだと感じられるでしょうか。

これらの「つまらない？！」破片を見て、当時の人々の生活ぶりを想像していただけるなら、今回の展示の目的は達したものと思います。

・「淡河町遺跡展示会」

・場所　淡河町地域福祉センター

・主催　神戸市教育委員会文化財課

・期間　平成10年１月31日～２月８日

・この展示にあたっては、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所のご協力を得ました。

展示会・見学会資料

平成10年度

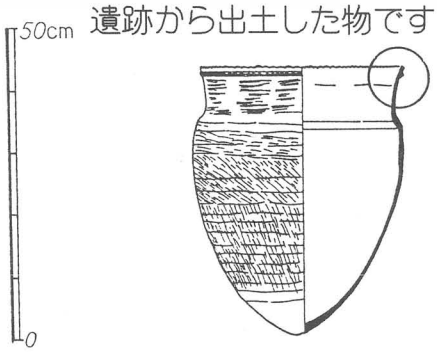
須磨区の遺跡 ― 戎町遺跡と大田町遺跡 ―

展示解説

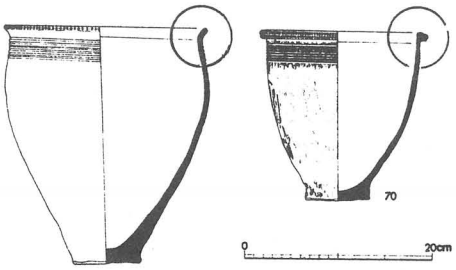
須磨は万葉の昔から歌にも詠まれる古い歴史を持った町です。平安時代の在原行平とこの地の姉妹との伝説や、それにちなんだ地名も残っています。

しかし、須磨の歴史はそればかりではありません。境川のあたりでは今から約１万年前にさかのぼる土器や石器などが見つかっています。

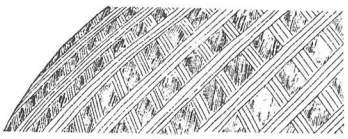
今回、ここに展示しましたのは、須磨区の代表的な遺跡とも言える戎町遺跡と大田町遺跡から出土した物です。以下、展示した物の一部をご紹介します。



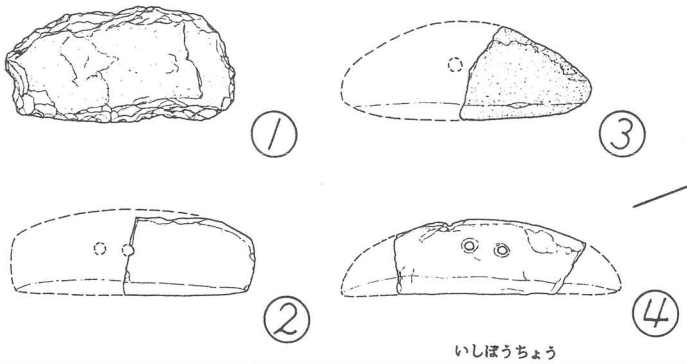
☆最初の縄文時代晩期の土器のうち、「深鉢」は小さな破片ですが左の図のような土器で、口の部分の破片です。

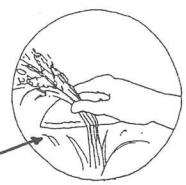


☆弥生時代前期の甕が２つありますが、口の形が少し違っているのがわかりますか？左のものはこの「摂津」地域で一般に見られるものですが、右は「播磨」－境川から西の地域－の影響をうけてつくられた土器です。



☆弥生時代中期の壺棺は、色々な文様で飾られていますが、左の絵の様な文様がありますね。これも「播磨」地域でよく見られるものです。





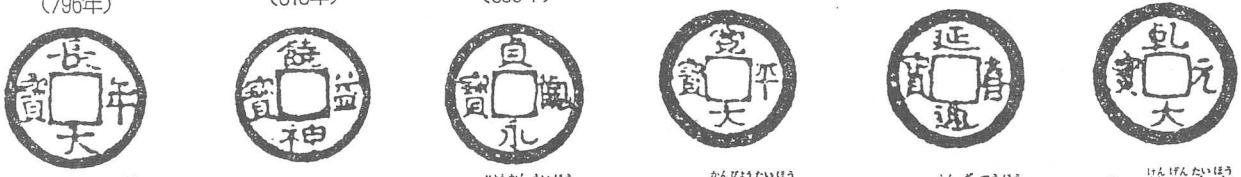
☆稲の穂を摘み取る道具「石庖丁」は、色々な種類の石で作られました。①と②は北区道場町塩田から、③は明石川の辺りから、④は和歌山県または徳島県からはるばる運ばれてきたものです。大型の石庖丁は奈良県または香川県のものでしょう。石ばかりか、土器も大阪府東大阪市の付近から運ばれています。

2000年も前からこの地域の人々は、様々な地方の人達と交流を持っていたことがわかります。

① 和同開珎（わどうかいほう）（708年）　② 万年通宝（まんねんつうほう）（760年）　③ 神功開宝（じんぐうかいほう）（765年）

☆奈良時代・平安時代の政府は計12種類の銅貨を作りました。１枚の「和同開珎」で約12合（12食ぶん）の米と交換ができました。ただ初めから二セ金が横行したり平安時代には粗悪（そあく）な銭が作られたりして、次第に銅銭は流通しなくなりました。

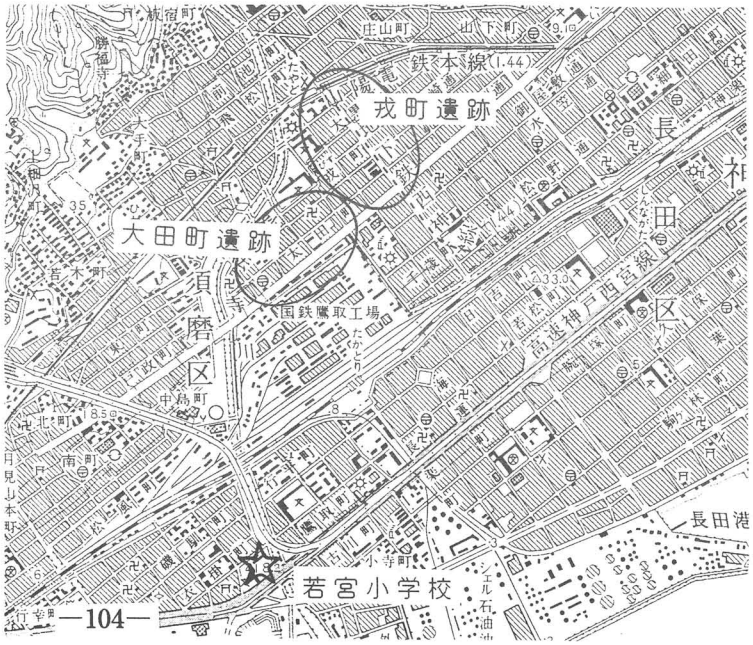
④ 隆平永宝（りゅうへいえいほう）（796年）　⑤ 富寿神宝（ふじゅしんぽう）（818年）　⑥ 承和昌宝（じょうわしょうほう）（835年）



⑦ 長年大宝（ちょうねんたいほう）（848年）　⑧ 饒益神宝（にょうやくしんぽう）（859年）　⑨ 貞観永宝（じょうがんえいほう）（870年）　⑩ 寛平大宝（かんぴょうたいほう）（890年）　⑪ 延喜通宝（えんぎつうほう）（907年）　⑫ 乾元大宝（けんげんたいほう）（958年）

☆曲物（まげもの）は古い絵巻（えまき）にも登場する容器で、米や水、お酒や野菜など様々なものを入れていました。

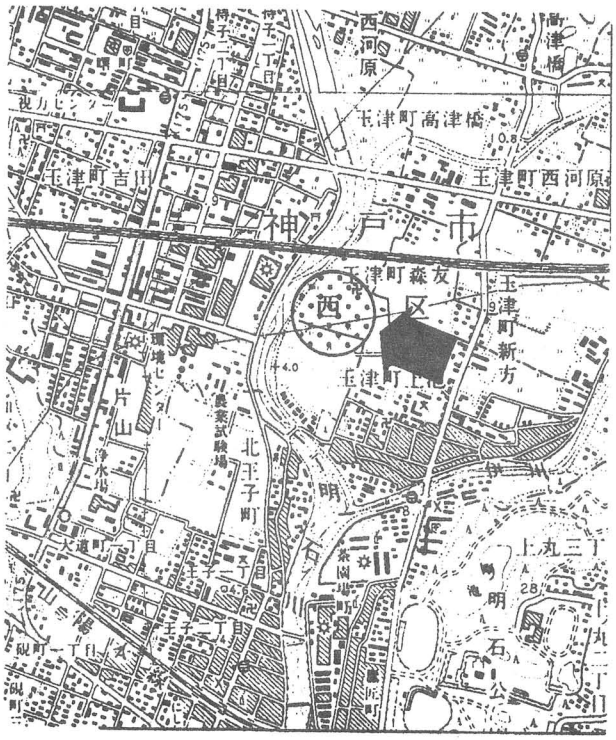
以上、少しですが展示したものについて説明しました。これらのものを通じて、当時の人々のくらしぶりを皆さんも想像してみてください。



・「須磨区の遺跡－戎町遺跡と大田町遺跡－」
・場所　須磨区若宮小学校
・会期　平成10年５月29日～平成10年６月19日
・主催　神戸市教育委員会文化財課

新方ムラのまつり

―野手・西方地点の出土遺物を中心に―

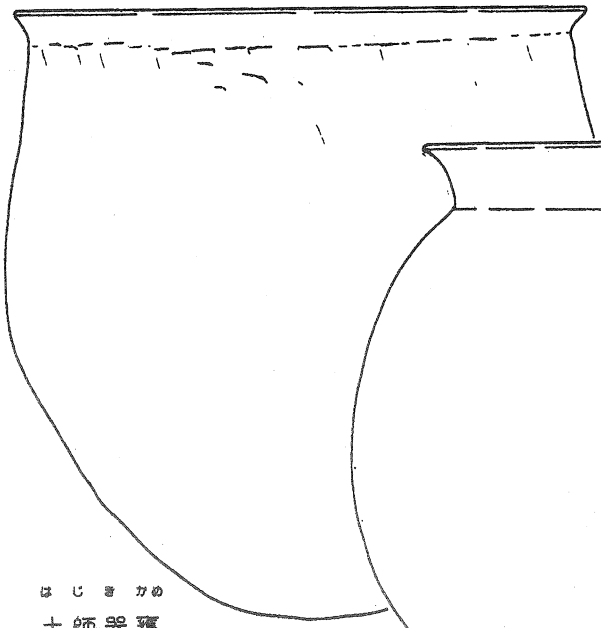


今回ここに展示していますものは、平成８年から９年にかけて発掘調査を行いました新方遺跡から出土した遺物です。この遺跡は明石川と伊川に挟まれた沖積地に立地する、今から約2300年前の弥生時代前期から江戸時代に続くムラの跡です。

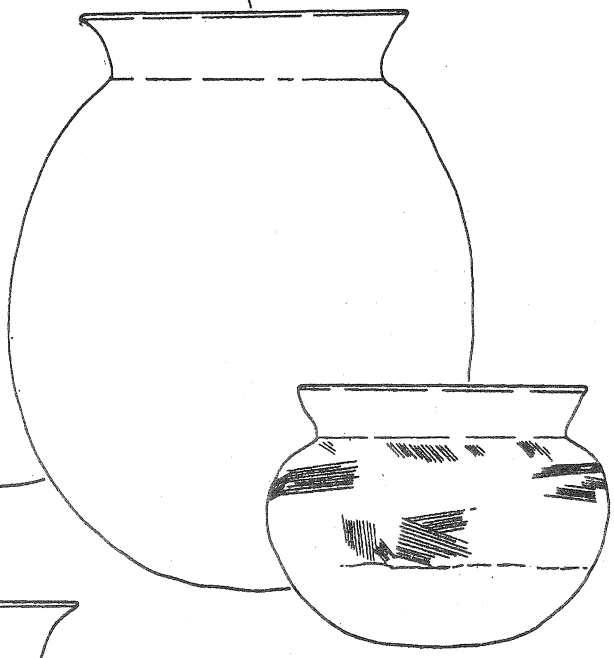
発掘調査の結果、弥生時代前期の石のやじりが刺さったまま葬られた人の骨や、弥生時代中期の方形周溝墓（周囲に溝を巡らす墓）、古墳時代の竪穴住居や奈良時代から鎌倉時代の掘立柱建物などが見つかっています。

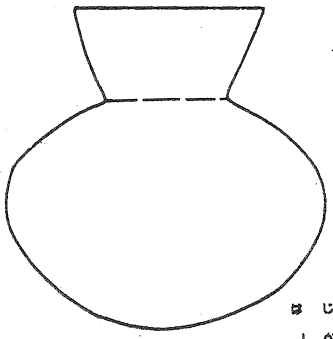
出土した遺物は大変多く、今回はその中で古墳時代中期（今から約1550年前）のものを展示しています。これらは一辺４ｍほどの方形の穴から出土しました。土器は素焼きの土師器が中心で甕が10個、壺が４個、鉢が６個、高杯が34個、甑が３個、飯蛸壺が約50個とミニチュア土器が２個、そして製塩土器の破片がありました。穴窯で焼いた灰色の須恵器は少なく樽形瓮１個と坏が数個、そして器台が１個あります。

これらの土器とともに出土した玉には、有孔円盤（銅の鏡を模したもの）34個、剣形５個、勾玉７個そして臼玉と呼んでいる直径５㎜程の玉が約5300個程あります。これらは本来銅や鉄、碧玉、メノウ、ガラスなどで作られるものを、柔らかくて加工しやすい、そして大量に手に入れることができる滑石や結晶片岩などで、鏡・玉・剣を模倣して作ったものです。これらは何らかの「まつり」に使われたと考えられています。新方ムラのまつりの対象がなんであったかは明らかではありませんが、飯蛸壺や製塩土器などの存在から、海の幸を願う「まつり」だったのではないでしょうか？

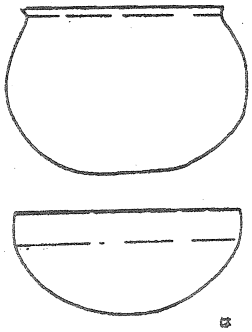


はじきかめ
土師器甕

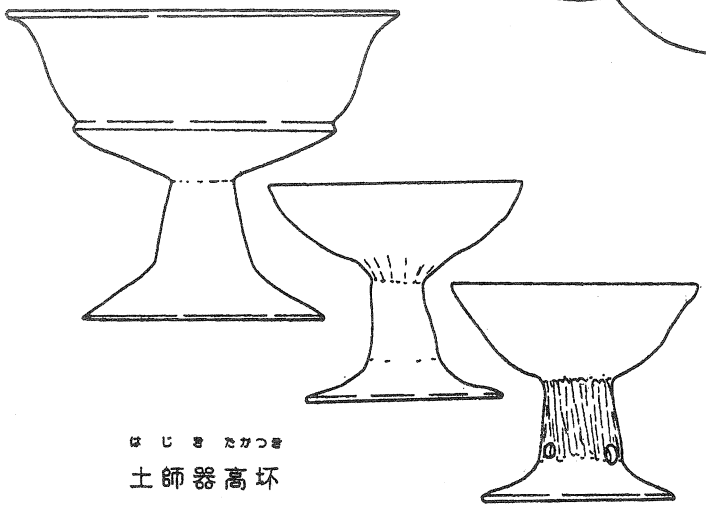




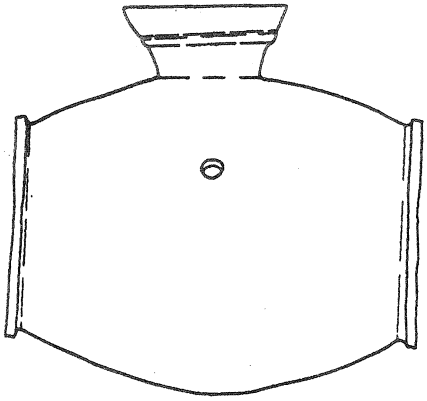
はじきつぼ
土師器壺



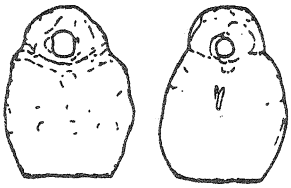
はじきはち
土師器



はじきたかつき
土師器高坏



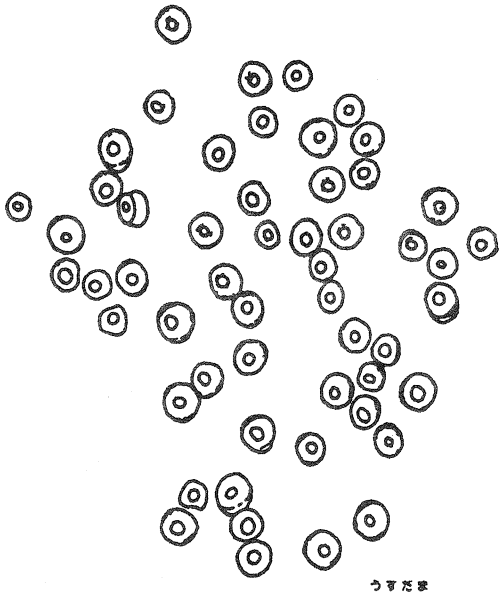
すえきたるかたはそう
須恵器樽形瓦器



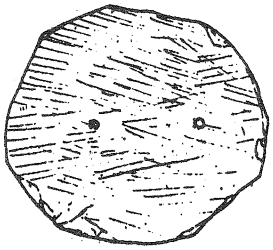
いいだこつぼ
飯蛸壺

ミニチュア土器

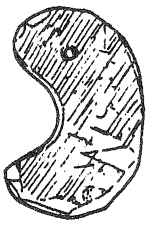
とき



うすだま
臼玉



ゆうこうえんばん
有孔円盤



まがたま
勾玉

けんがたひん
剣形品

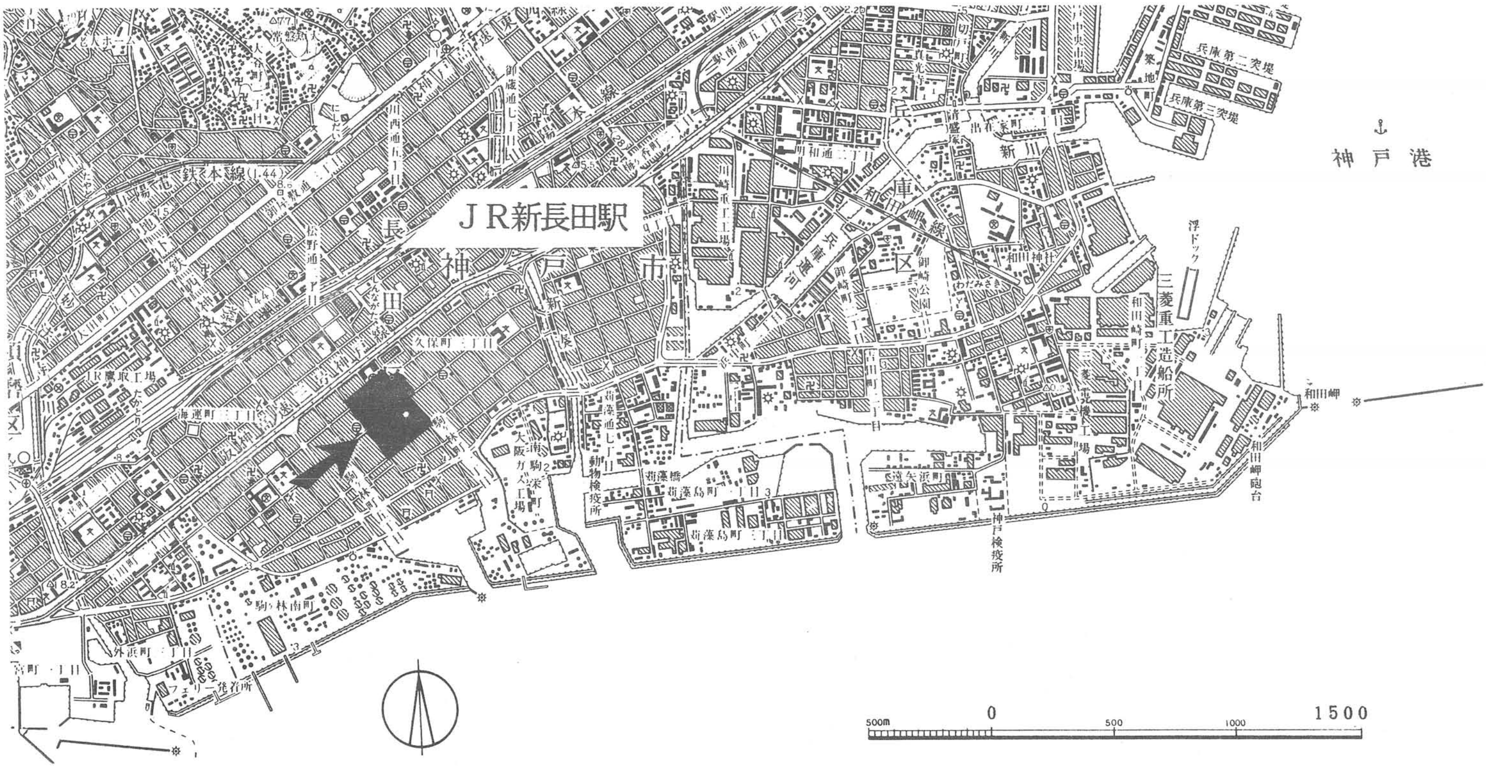
・「新方ムラのまつり－野手・西方地点の出土遺物を中心に－」展
・場所　玉津南公民館
・会期　平成10年６月24日～７月３日
・主催　神戸市教育委員会文化財課

土器は１／４に縮小、玉類は実物大です。

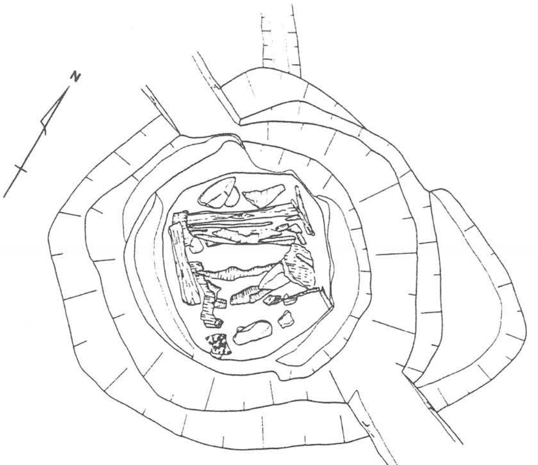
ふたばちょういせき

二葉町遺跡出土の船材について

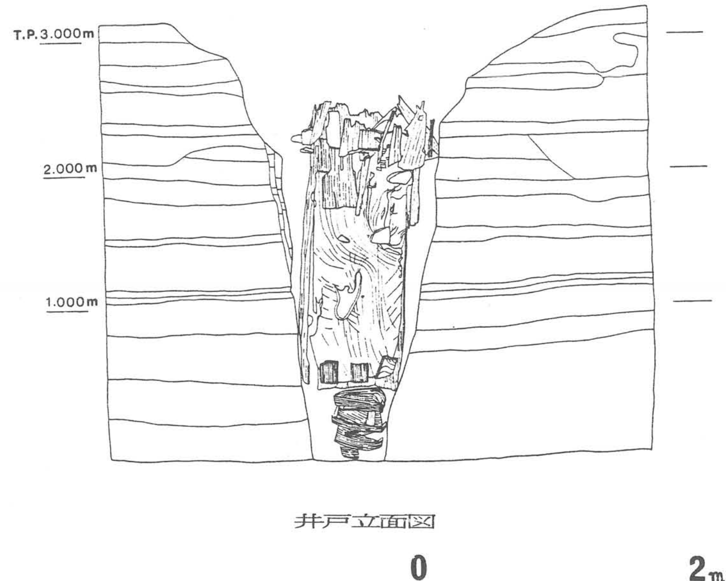
二葉町遺跡は、現在の海岸線から約500m内陸に入った海抜３～４ｍの平野部に立地した平安時代～室町時代の集落遺跡です。



今回の発掘調査では、今までのところ掘立柱建物(ほったてばしらたてもの)５棟以上と井戸を８基発見しました。船材を再利用した井戸は、直径３ｍの円形の堀方(ほりかた)の中に一辺１ｍの方形の井戸枠(いどわく)を設けていました。その下に井戸の中が崩れないように井戸側(いどがわ)として船材がたてられていました。さらに下には、水を溜(た)めるために、曲物(まげもの)が据(す)えられていました。

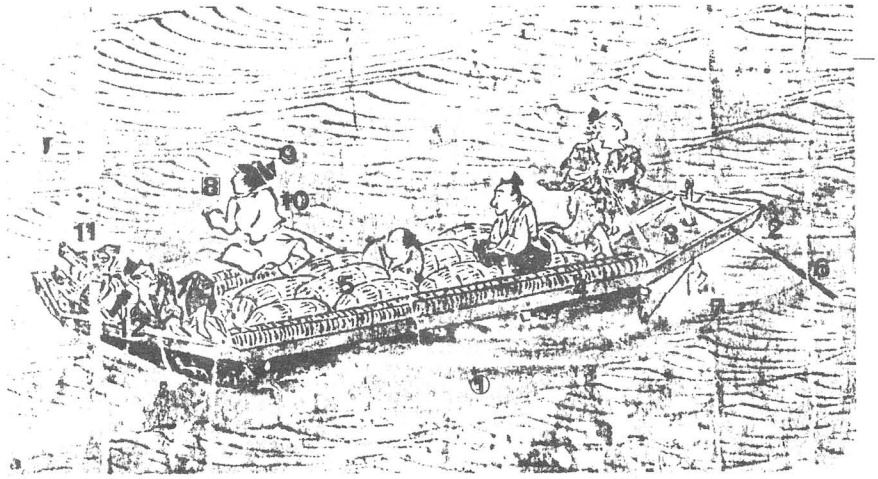


井戸平面図



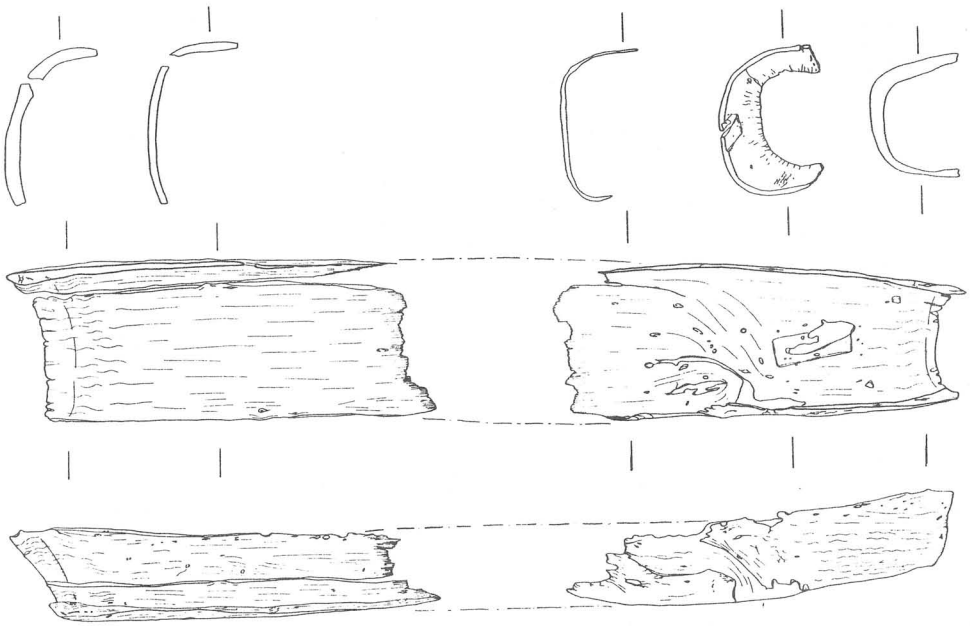
井戸立面図

船材と一緒に出土した土器片（須恵器・土師器・瓦器・青磁・白磁等）から井戸が使われなくなった時期は、鎌倉時代（13世紀初め）であることが判りました。同じ時代の船の構造を知る手掛かりとしては、「一遍上人絵伝」などの絵巻物がありましたが、水中の船体構造は描かれないためよく解りませんでした。



1 ―小型商船
2 ―波除け
3 ―艫〔とも〕
4 ―波除け部〔なみよけしとみ〕
5 ―米俵
6 ―櫓〔ろ〕
7 ―舵〔かじ〕
8 ―櫓を漕ぐ
9 ―侍烏帽子〔さむらいえぼし〕
10 ―小袖〔こそで〕
11 ―木碇〔きいかり〕
12 ―肘枕〔ひじまくら〕

井戸側を取り上げ、詳細に観察した結果、この船材は、楠木の大木の根に近い部分を刳り抜き、端部を分厚く受け口状に加工し、鉄釘が打ち込まれていることから船首と船体胴部を継ぎ足す「複材刳船」（三材構造）の船でした。また、船体胴部の側面は50cmと立ち上がりが深く、側上部には横長楕円の穿孔と釘穴があることから、さらに上部に舷側板が取り付けられた可能性が考えられます。



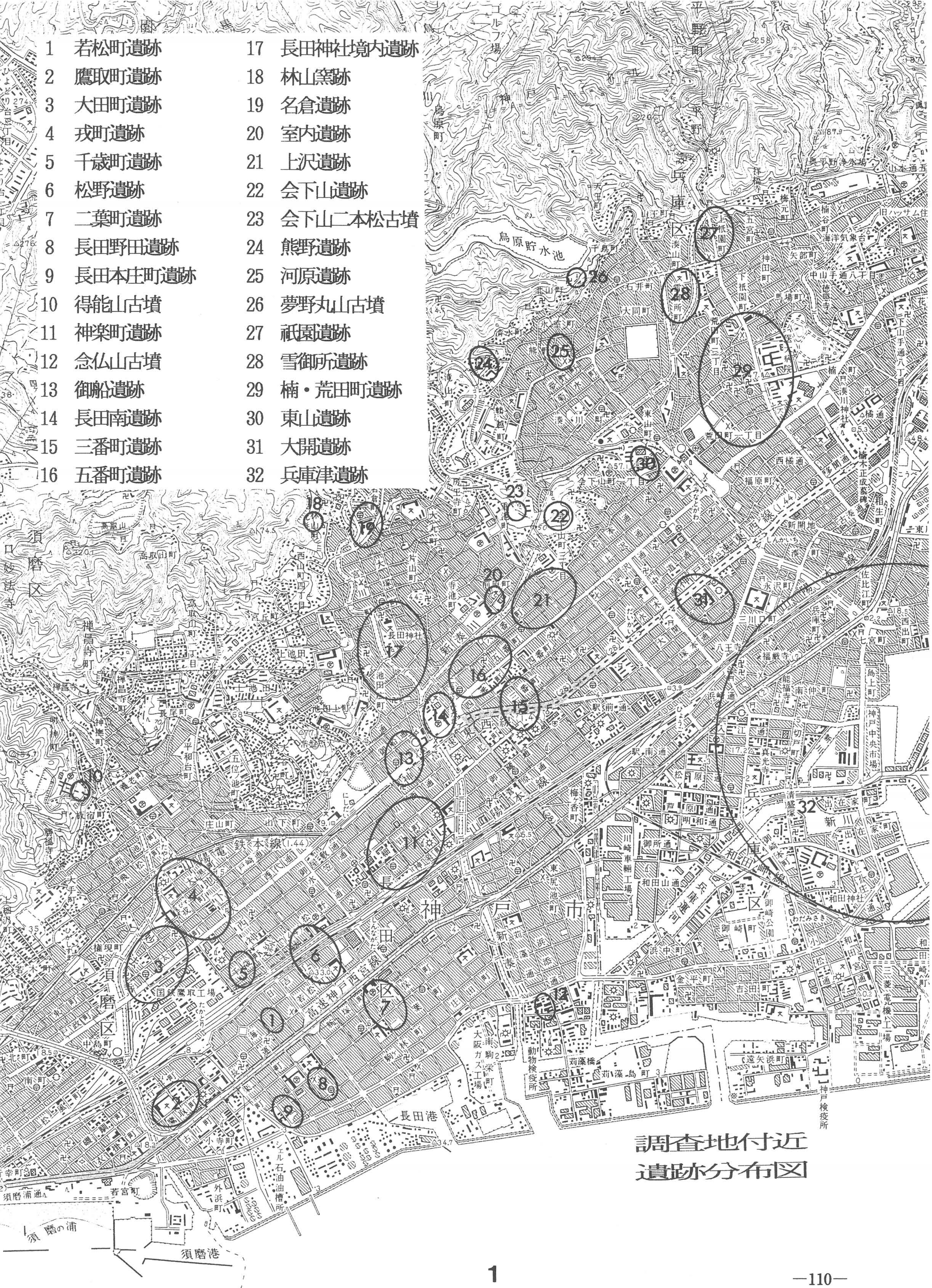
二葉町遺跡出土船実測図　0　1m

発掘を体験しよう！！

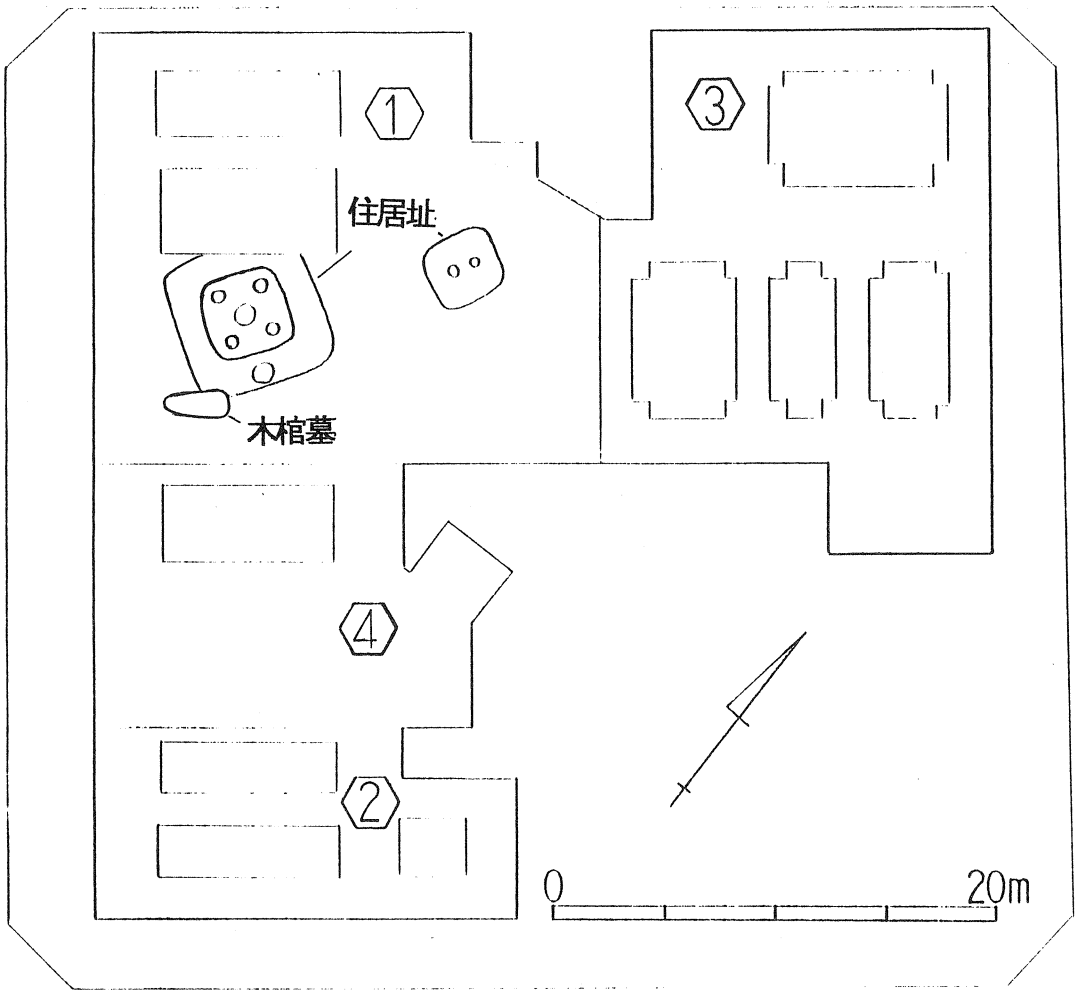
若松町遺跡第２次調査

１９９８．７．２８

神戸市教育委員会


1 若松町遺跡
2 鷹取町遺跡
3 大田町遺跡
4 戎町遺跡
5 千歳町遺跡
6 松野遺跡
7 二葉町遺跡
8 長田野田遺跡
9 長田本庄町遺跡
10 得能山古墳
11 神楽町遺跡
12 念仏山古墳
13 御船遺跡
14 長田南遺跡
15 三番町遺跡
16 五番町遺跡
17 長田神社境内遺跡
18 林山窯跡
19 名倉遺跡
20 室内遺跡
21 上沢遺跡
22 会下山遺跡
23 会下山二本松古墳
24 熊野遺跡
25 河原遺跡
26 夢野丸山古墳
27 祇園遺跡
28 雪御所遺跡
29 楠・荒田町遺跡
30 東山遺跡
31 大開遺跡
32 兵庫津遺跡
須磨区
長田区
兵庫区
神戸市
長田港
須磨港

調査地付近遺跡分布図



調査地区割図

今回の調査でわかったこと（第１地区）

ふたつの時代の生活面がありました。弥生時代後期（約１８００年前）と古墳時代前期（約１７００年前）の生活面です。

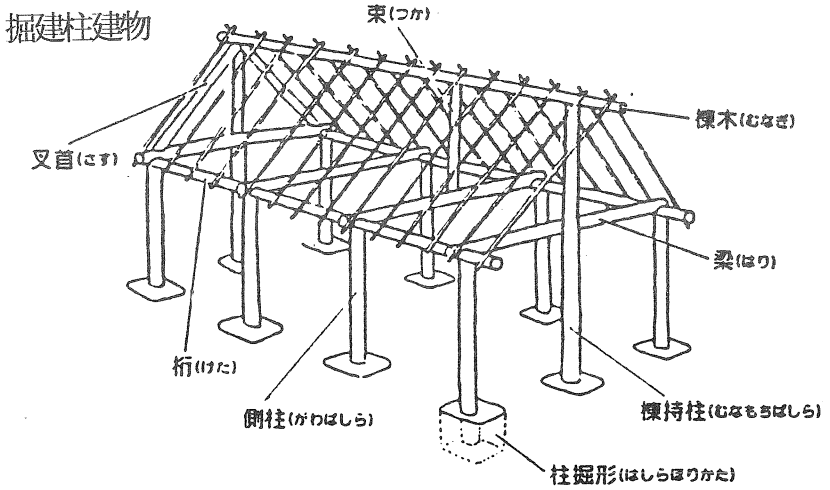
最初の生活面（第１遺構面）にはふたつの時代の遺構と遺物が出てきました。鎌倉時代（約８００年前）の溝や墓と古墳時代の家のあと（住居址）です。
鎌倉時代の墓からは、お供えに使った壺や皿や小さな刀（刀子－とうす）が出土しました。また葬られた人の歯が２つ出土しました。

古墳時代の住居址は、一辺が約４mの長方形の家です。住居址の床面からは壺や甕が出土しました。またわずかですが炭化した木材も検出されました。この住居址が火災にあった可能性があります。他に柱の穴が２か所検出され、２本の柱で屋根をささえていた構造であったことがわかります。

もうひとつの生活面（第２遺構面）では、弥生時代後期の住居址と溝が出てきました。この住居址は一辺が約7.5 mのかどがとれたような正方形の家です。この住居址からも土器（壺・甕・高坏）や鉄製品が出土しました。また先の住居址と同じく炭化した木材が検出されました。

第２・４地区を現在調査中です

鎌倉時代の生活面を現在調査中です。建物（掘建柱建物－ほったてばしらたてもの）の柱穴がたくさん見つかっています。またこの時代の土器もたくさん出土しています。これらに混じって弥生時代の石のやじり（石鏃－せきぞく）も見つかりました。



『豊饒の大地』より

遺跡はどうして見つかるのでしょうか？

分布調査や試掘調査をおこなうことによって見つけていきます。

分布調査　田や畑や山林を歩いて、土器などが落ちていないかを確かめて行く方法

試掘調査　地面に試し掘りの穴をあけ、土器などが含まれて層（遺物包含層）があるかどうかを確かめて行く方法

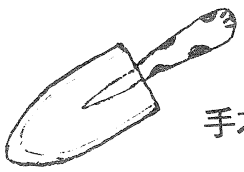
このふたつの方法を併用しながら、その記録を地図に記録していきます。こうしてできたものを遺跡分布地図といいます。

なぜ、発掘調査をするのですか？

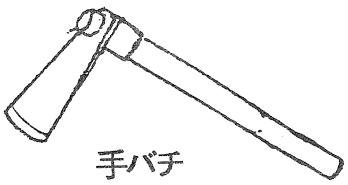
工事などによって地下に埋もれている貴重な資料が明らかにされないまま、破壊されることがないようにするために発掘調査をおこないます。

発掘調査で得られた成果は、その土地の歴史を明らかにする資料となります。

またこのように発掘調査で得られた成果は、現地説明会をおこなったり、展覧会を開催して市民の皆さんに見ていただけるようにしています。そしてまた埋蔵文化財に関心をもっていただき、その重要性を理解していただけるように努力しています。



手スコ

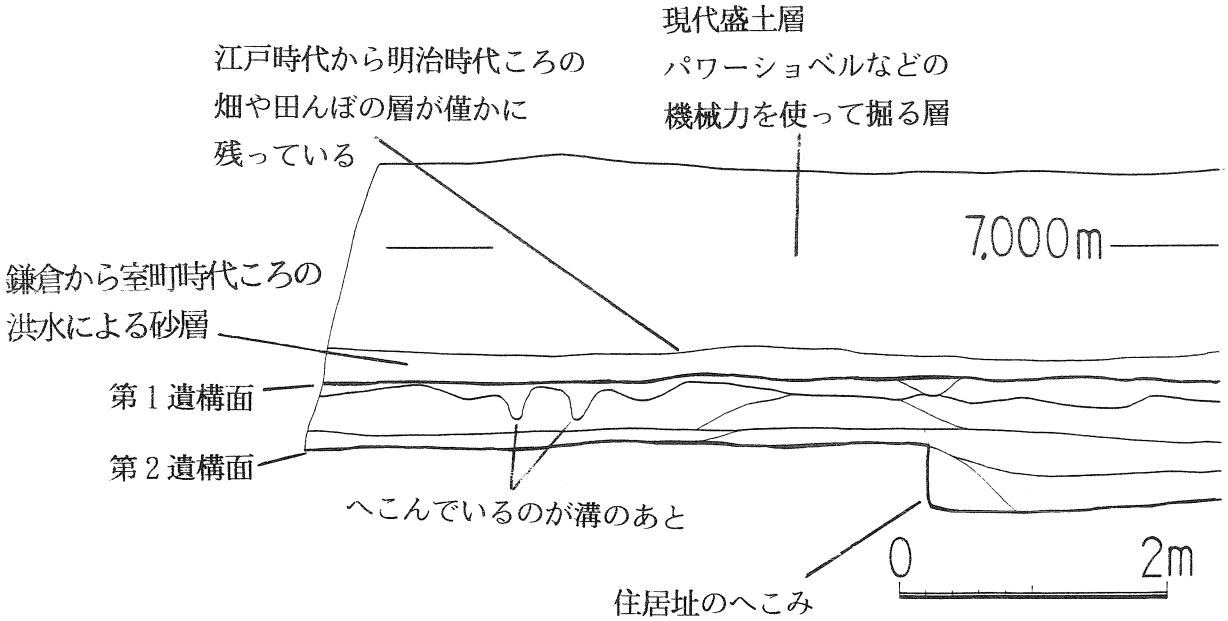


手バチ

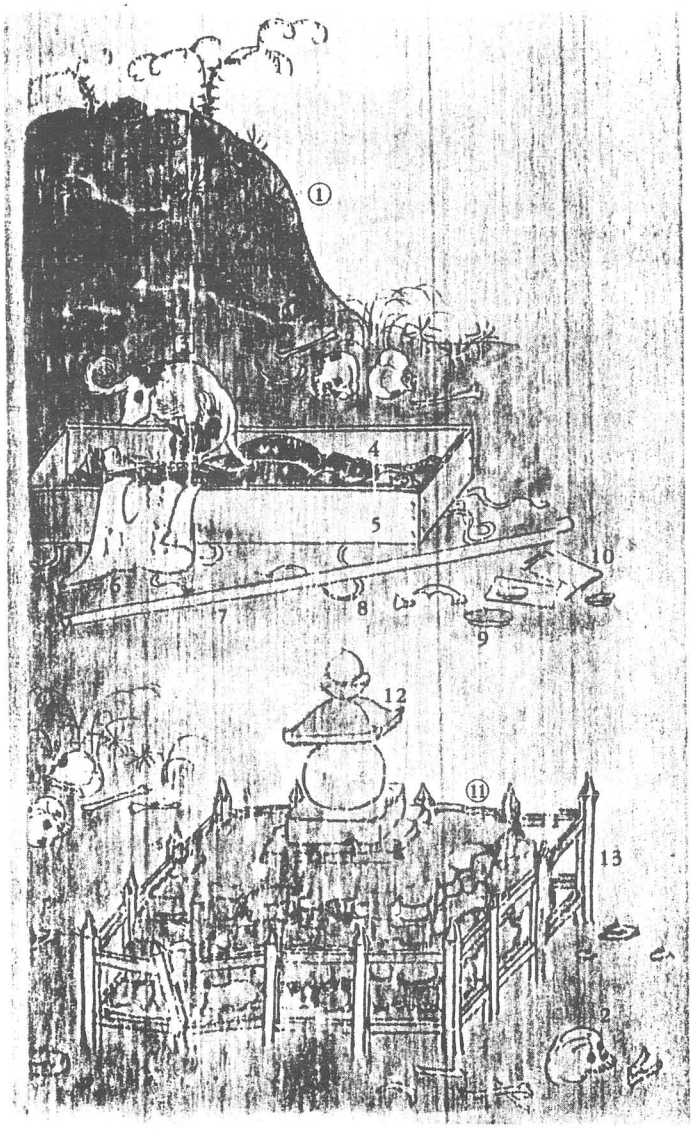
発掘調査の手順（断面実測図参照）

1　パワーショベル等の機械力を用いて遺跡の存在する層まで掘る
2　スコップやつるはしなどの大きな道具で残ったレンガやタイルの入っている土を取り除く
3　土器などが含まれて層（遺物包含層）を手バチ・手ガリ・手スコで掘る
4　出てきた土器は遺跡名・出土層・日付などを書き込んだラベルとともに遺物袋に入れる
5　手ガリ・手スコで層の表面を丁寧にけずり遺構（柱穴・溝など生活の痕跡となるものを総称して遺構という）を検出する
6　遺構を掘る　遺構によってはその埋まりかたなどを明らかにするため断面図を書いたり、写真をとる
7　遺構を測量機械を用いて図面を書く
8　遺跡の部分や全体の様子を写真にとる
9　遺跡を埋めもどす（現地調査の完了）

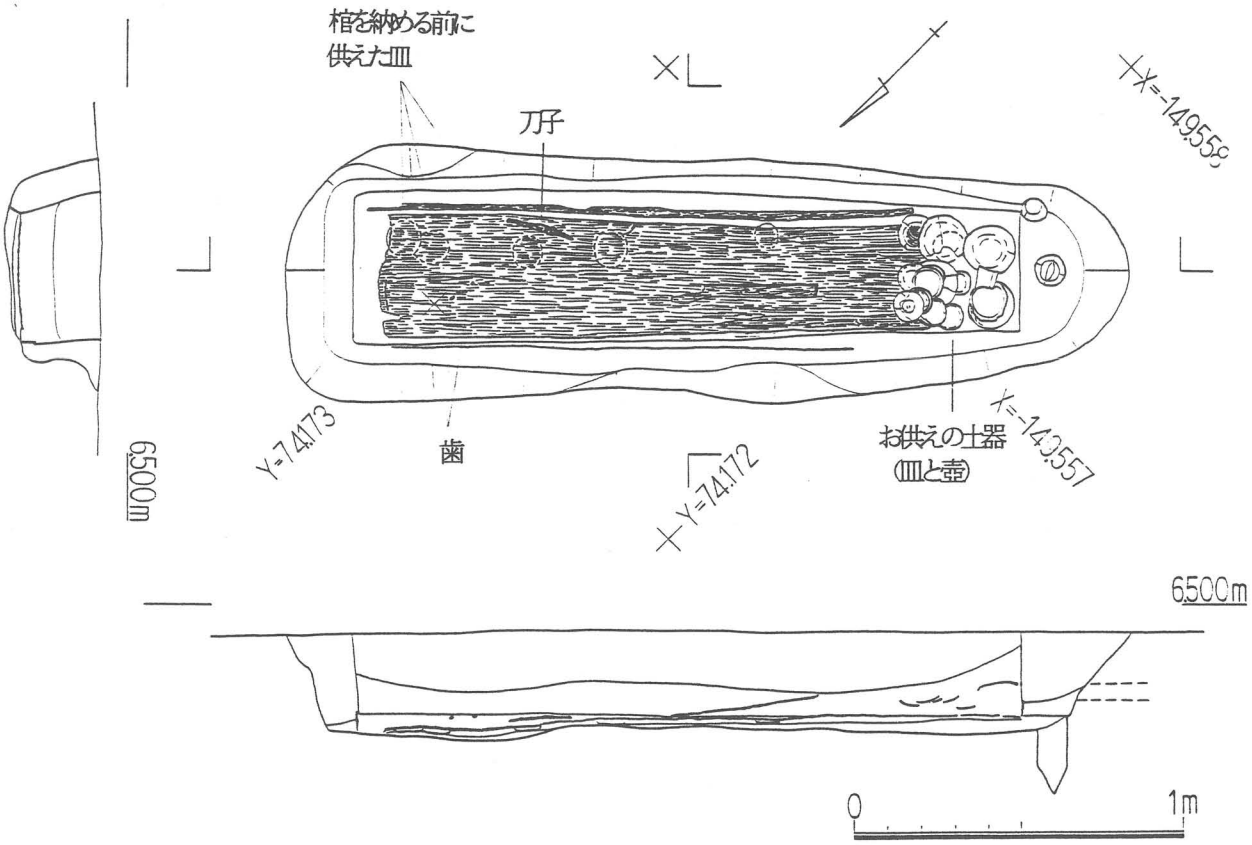
10　写真や図面の整理
11　出土遺物を洗う
12　出土遺物を復元する
13　出土遺物を実測する
14　出土遺物の写真をとる
15　発掘調査の報告書を書く
16　整理がすんだ写真・図面・遺物などを収納・保管する



断面実測図

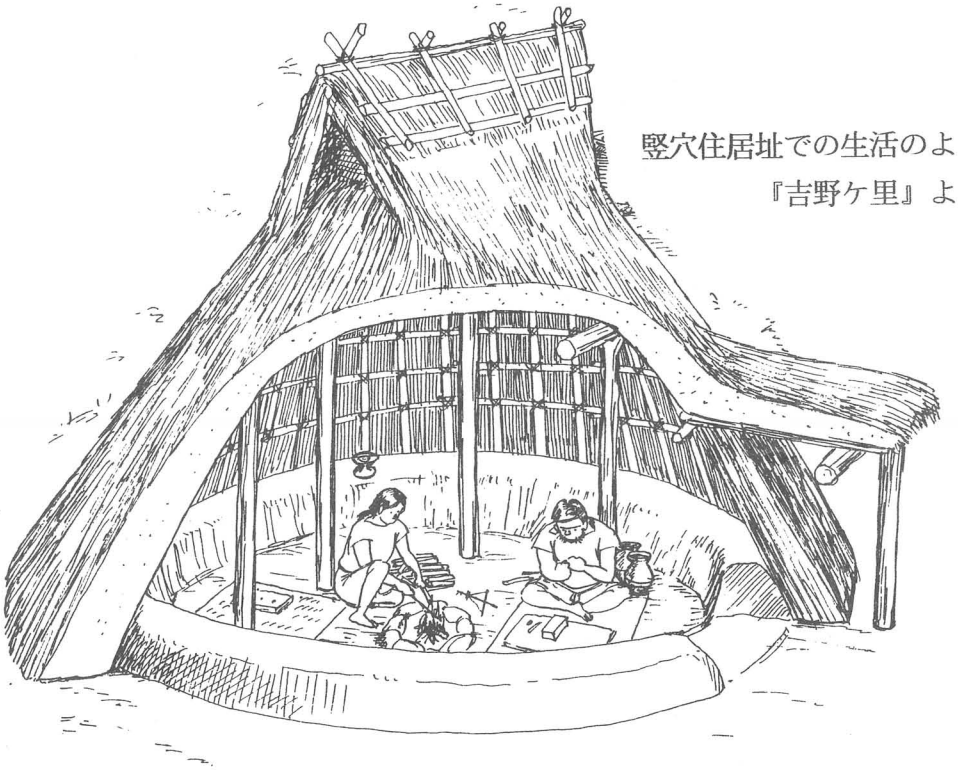


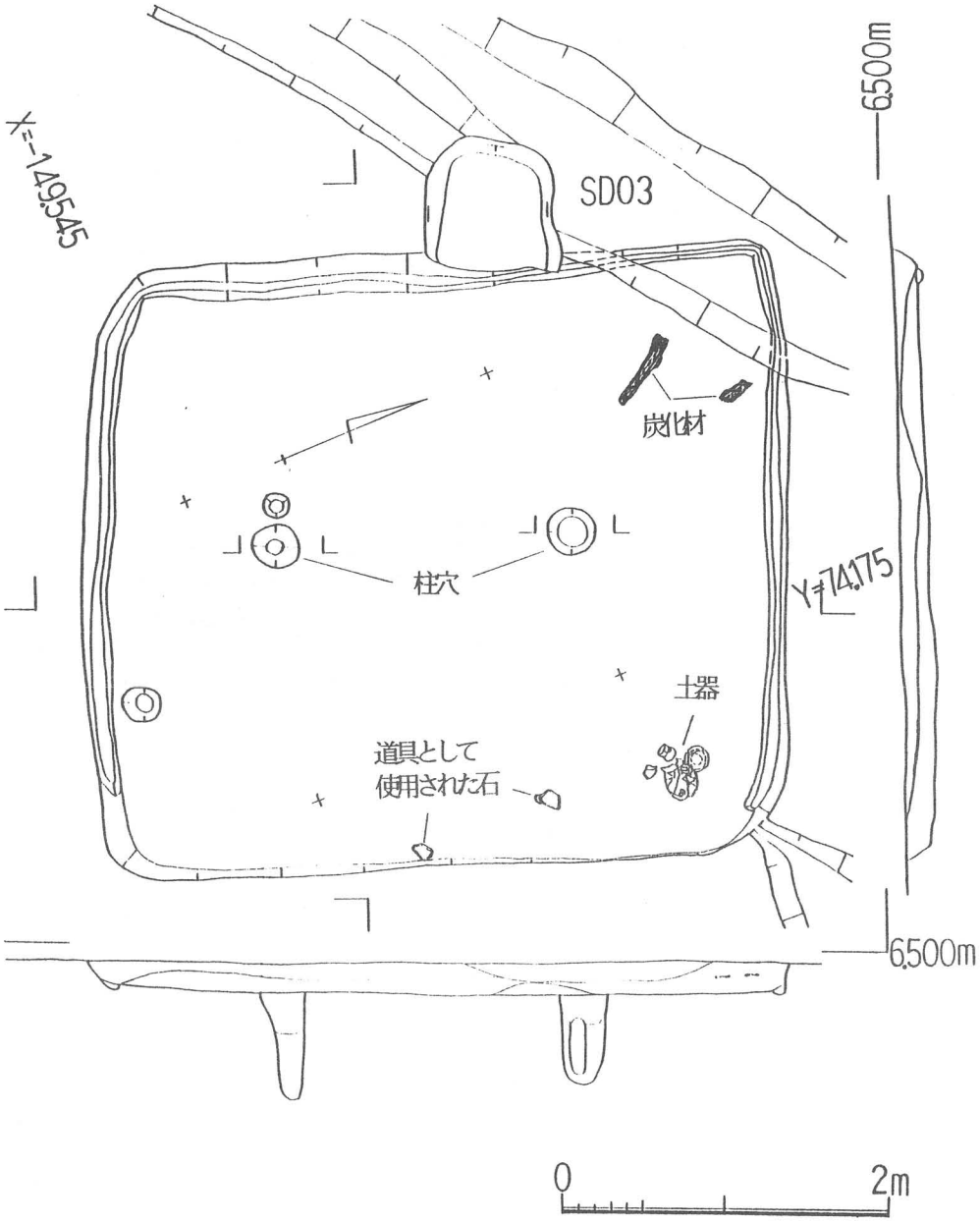
中世のころのお墓のようす
『餓鬼草紙』より



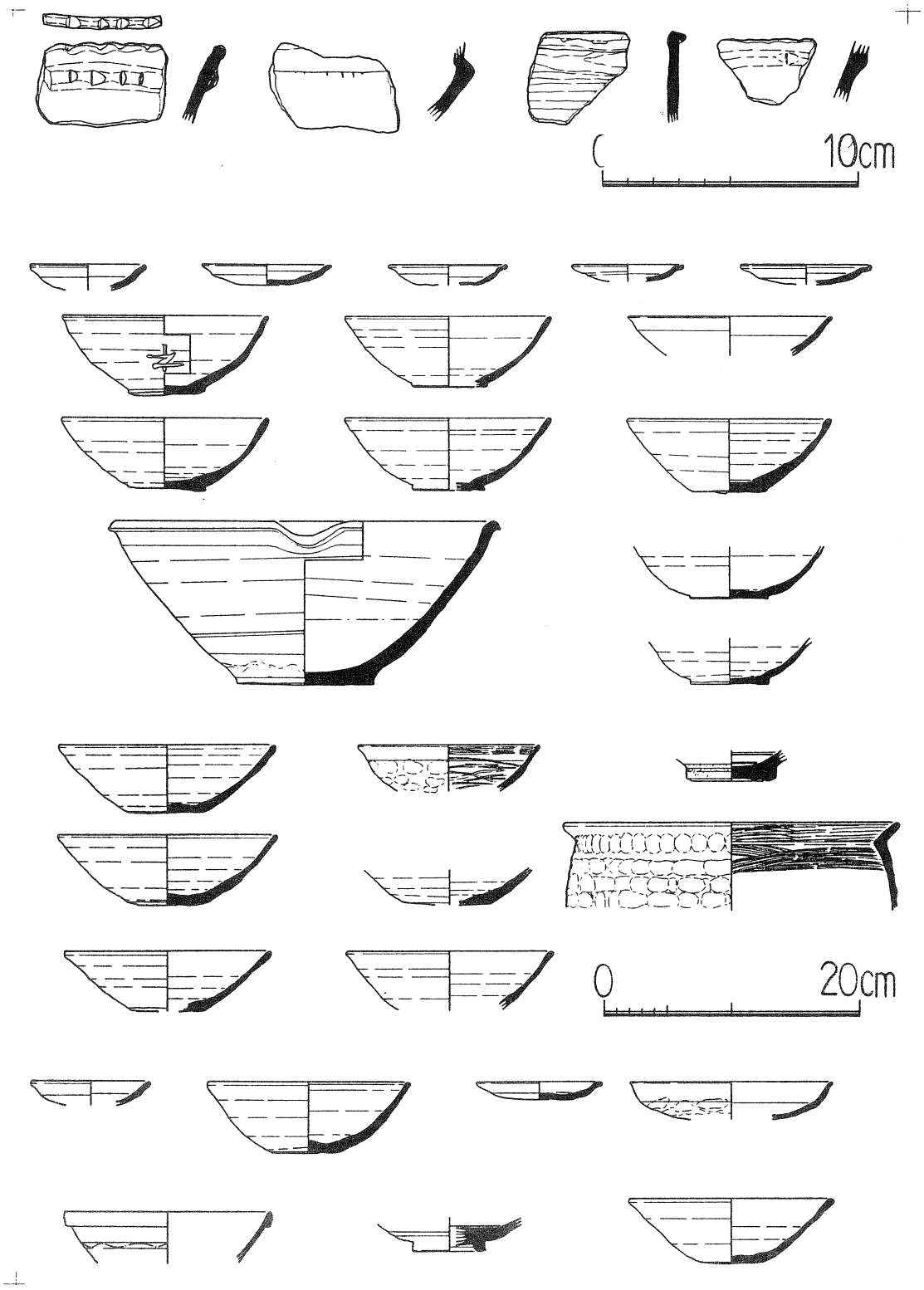
5　木棺墓平面及び断面図

竪穴住居址での生活のようす
『吉野ケ里』より





6 住居址平面及び断面図



二葉町遺跡第７次調査
出土遺物実測図

自分でほり出した土器と図面や見本に並べてある土器と
よく見くらべてください。

若松町遺跡の付近で
最近調査された遺跡の
出土遺物です。

7

地下に眠る道場の歴史展

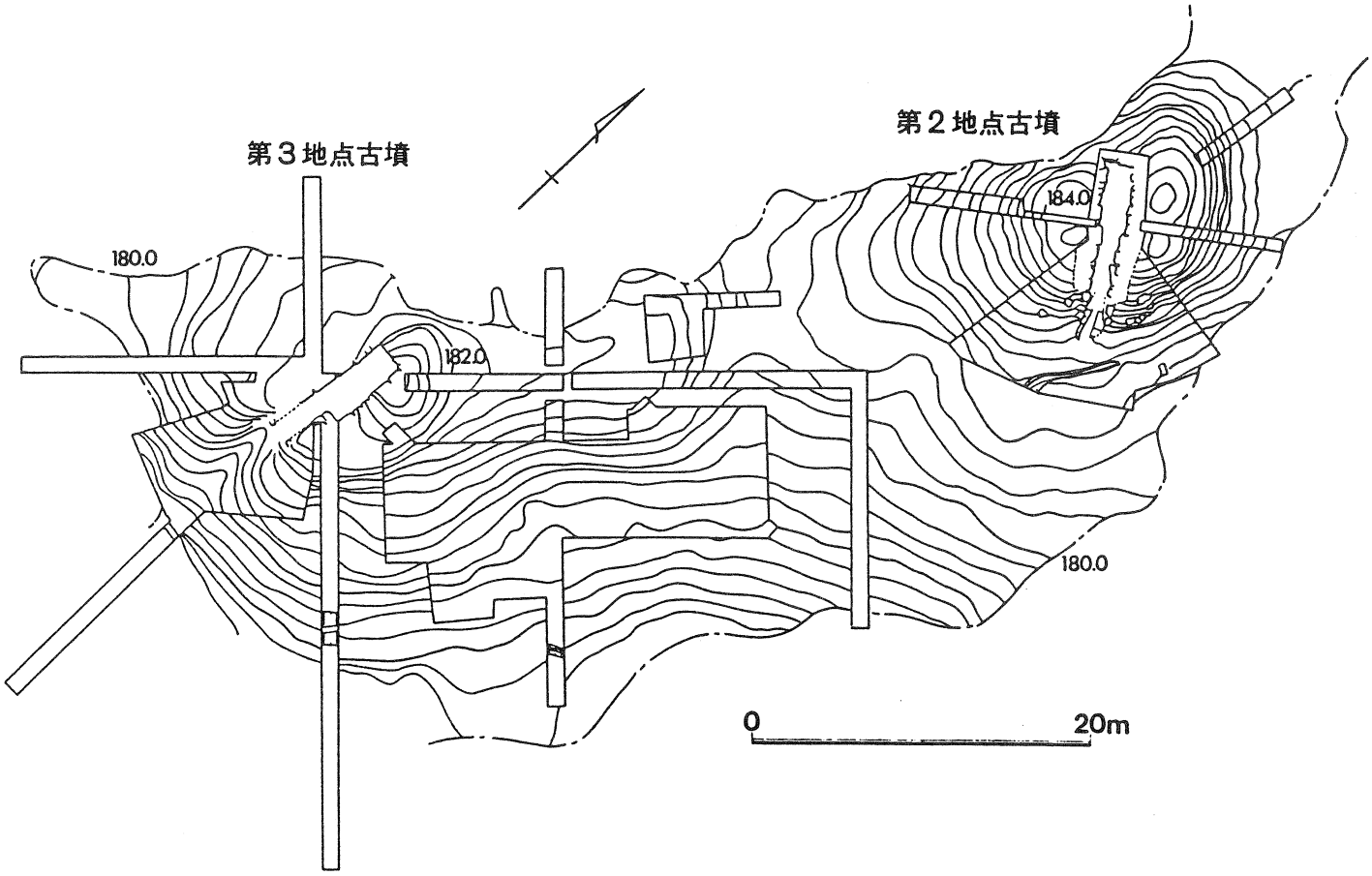
—北神第２地点古墳と第３地点古墳—

神戸市教育委員会

平成10年11月2日・3日

道場は、古くから交通の要衝であり、日本海に抜ける国道176号線や、三木方面に抜ける県道神戸三田線など、現在でも主要幹線が町内を通っています。また、長尾川・八多川・有野川・有馬川が合流して武庫川に流れ込む地点でもあり、これらの河川は、農耕に適した平地を形成しました。道と川は、人・物・文化を運び、その交流の中から道場の歴史は始まりました。それは今から約2000年前の弥生時代のことです。

今回展示しているものは、今から約1450年前の古墳時代のもので、北神第２地点古墳と第３地点古墳から出土した遺物です。これらの２つの古墳は、道場を見下ろす丘陵の上に築かれています。この丘陵では６基の古墳が調査されていますが、同じ時期に造られた古墳がありません。このことから、この地域を治めていた有力者が、次々と葬られた場所であった事がわかります。



第２・第３地点古墳測量図

第２地点古墳は６世紀中ごろの古墳です。直径約 17m、高さ約 2.5m の円墳で埋葬施設は南東方向に開口した横穴式石室です。遺体を納める部屋（玄室）の天井は失われていますが、約２mの高さがあった様です。石室に使われた石材は、この付近で取れる加工のしやすい石（凝灰質砂岩）を使っています。玄室の中は土が流れ込んだり、掘り込まれたりしたため、お供えに使われた物はほとんど残されていませんでしたが、玄室へ続く部屋（羨道）からは、当時に置かれたままの状態で土器が見つかりました。その他に鉄のやじりや装飾品などが出土しました。また石室の入り口で大きな土器が砕かれた状態で見つかり、死者のためのお祭りをした跡と考えられます。

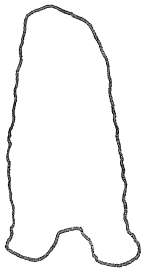
第３地点古墳は６世紀中ごろの古墳です。全長約 36mの前方後円墳で、埋葬施設は南方向に開口した横穴式石室です。天井石は失われていますが、約 2.5m の高さがあった様です。石材は、１号墳と同様、凝灰質砂岩です。見つかった遺物はわずかですが、土器の破片のほかに、鉄のやじりや馬具、ガラスの小玉などが見つかりました。玄室の石材に「○」印が掘り込まれており、非常に珍しいものです。

現在、この２つの古墳は整備されて自由に見学できるようになっています。神戸電鉄道場駅のすぐ北側ですので、一度訪ねてみてはいかがですか。

須磨区の遺跡

前回（今年５～６月）は、戎町遺跡と大田町遺跡を中心に展示をしました。今回は、最近発掘調査した中で、天神町遺跡と権現町遺跡のものを加えて皆さんに見てもらおうと思います。

前の展示の時に、須磨区の境川あたりで今から約１万年前の土器や石器が見つかっていることを紹介しましたが、そのときには実際に石器などを持ってくることは出来ませんでした。しかし、今回ちょうど調査をしている天神町遺跡で、この10月に同じ時代の石器が見つかりました。

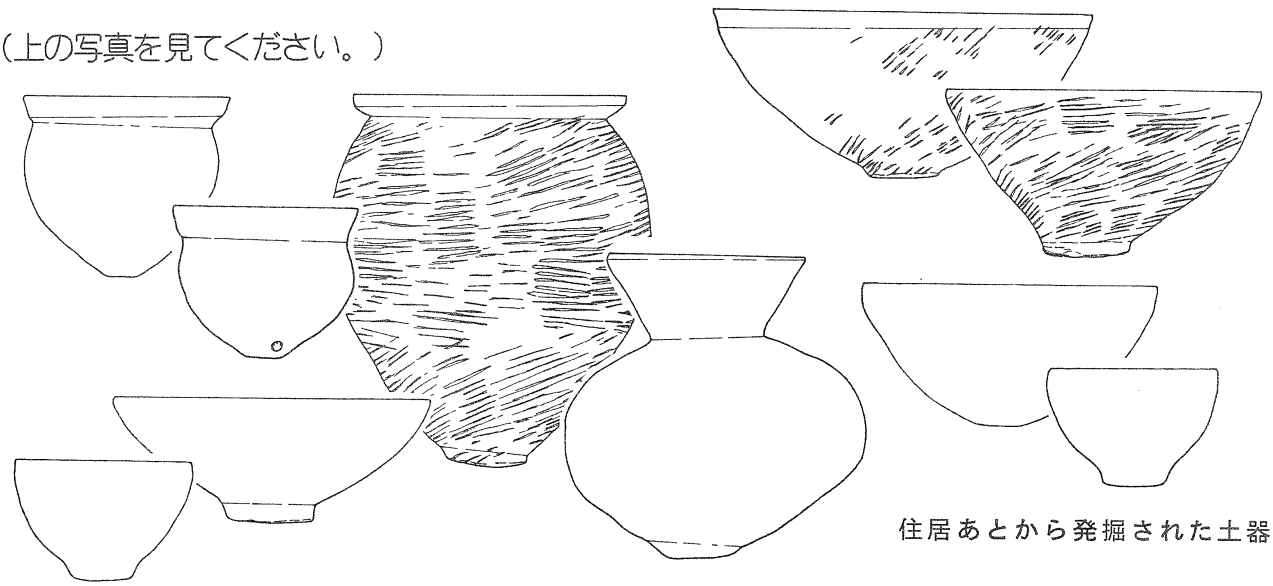


★左の絵のような形をした石器が、最初にありますね。これが、今から約１万年前のもので、動物を狩るためのヤリ先だと考えられているものです。

←局部磨製石器と言います。

寺田町３丁目（戎町遺跡）で見つかった、約1800年前の住居あとは、一辺４ｍの四角形で床面に炭化した柱などが残っていたことから見て、火事にあったようです。使っていた土器を運び出す余裕もなかったのでしょう、土器がそのままの状態で残されていました。

（上の写真を見てください。）

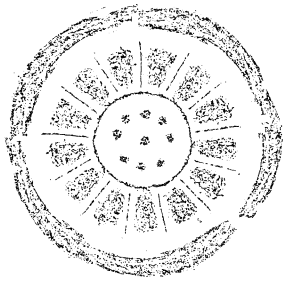


住居あとから発掘された土器

勾玉・実物大

★板宿駅の南（平田町３丁目・戎町遺跡）からは、約1700年前のアクセサリー、勾玉が見つかりました。どんな人が身につけていたのでしょう。ムラの長のような人物でしょうか。興味がわきます。

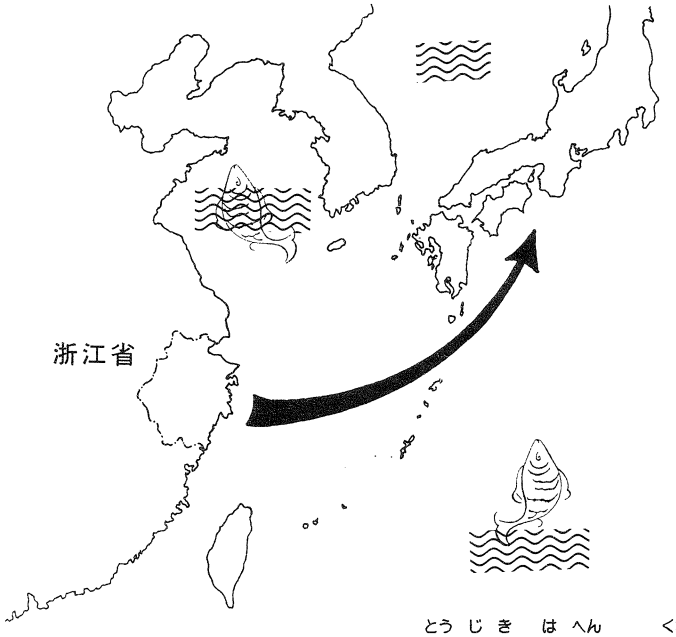
天神町遺跡では奈良時代終わりころの、権現町遺跡では平安時代中頃の屋根瓦が発掘されました。その頃、瓦屋根の建物は少なく、お寺や役所、一部の有力者の家などに限られます。瓦が出てきた場所に何が建っていたか、まだよく判りませんが調査が進めば、段々と明らかとなっていくことでしょう。

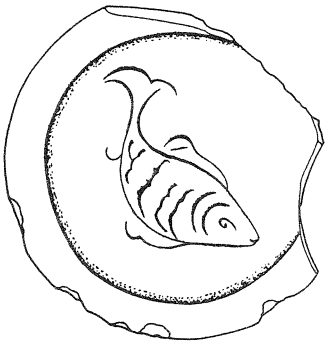


★出土した瓦のなかで１つ面白いことがあります。西区の神出と言う所では、平安時代から鎌倉時代にかけて瓦を焼いていましたが、権現町遺跡から出た瓦にこの神出で作られた瓦とそっくりのものがあったのです。これから900年も前に神出産の瓦がここ須磨まで運ばれてきたことが明らかとなったのです。

破片を復原するとこのようになります。

「運ばれた」と言えば、800年前にもっと遠い所から運ばれたものがあります。それが次にある魚の文様があるお皿（青磁小皿）です。これは今の中国浙江省で焼かれたものです。当時の中国（南宋時代）との貿易で日本に輸入されたものなのです。





青磁小皿

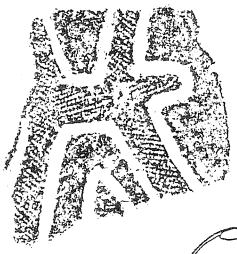
このように、瓦のカケラや陶磁器の破片でも詳しく調べていけば、昔の須磨に住んでいた人々がどこの地域の人達とかかわりを持って生活をしていたのか、というような事まで判ってくるのです。

『須磨区の遺跡』展
・場所　若宮小学校
・会期　平成10年11月14日～12月１日
・主催　神戸市教育委員会　文化財課

宮川小学校と周辺の遺跡

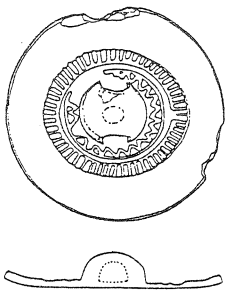
宮川小学校は、今回の震災で大きな被害を受けました。そこで、校舎を建て替えることになり、それに伴って地下の遺跡の発掘調査を行いました。この辺りは「長田神社境内遺跡」の範囲です。この遺跡は大正13年に神社の境内から弥生土器などが発見されたことからこう呼ばれています。

今回、校舎の竣工式を迎えることができ、この機会に小学校の発掘調査で出土した物と以前に調査したものの一部を展示します。以下主なものについてご紹介しましょう。



縄文時代後期の土器

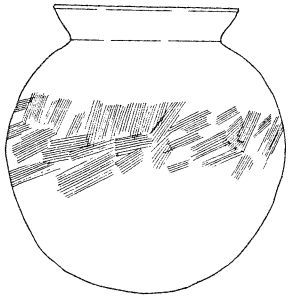
◆区内で最古の土器は、名倉町で見つかった縄文時代中期末頃（今から約4000年前）のものですが、大塚町１丁目の調査でこれよりやや新しい後期初めの土器が出土しました。



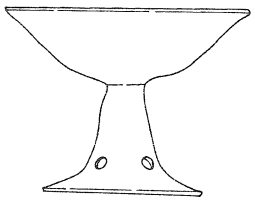
青銅鏡

◆長田町１丁目や大塚町１丁目では、縄文時代晩期（今から約3000年前）の土器や弥生時代後期（今から約1900年前）の住居址なども見つかっています。六番町の長田中央市場の地下からは、直径約６cmほどの青銅の鏡も出土しました。

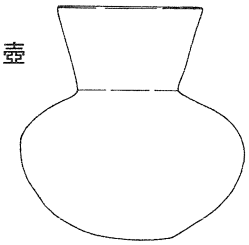
宮川小学校で出土したものは、垂水にあるあの巨大な古墳、五色塚が作られた時から、約50年ほど経った頃（古墳時代中期、今から約1550年前）のものと、今から約800～400年前（鎌倉時代～室町時代）のものが中心です。



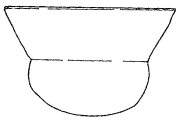
甕



高杯



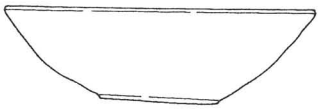
壺



小型丸底坩

◆古墳時代中期の土器の中には、　　の形をしたお祭り用と考えられているものが多くありました。当時の人々は何を祈っていたのでしょう？

このほか、「韓式土器」と呼んでいる朝鮮半島で出土するものと大変よく似た土器が、見つかっています。2300年前に日本人にお米を食べることを教えたのも朝鮮半島の人達でした。1550年前のこの韓式土器も、当時の人々と朝鮮半島の人達との交流を証明しています。

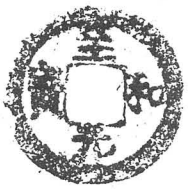


須恵器椀

◆鎌倉時代～室町時代の食器なども沢山見つかっています。それらのなかには、西区神出あたりで作られたと思われる須恵器（窯で焼かれた灰色の土器）椀や、篠山町で作られた丹波焼の甕、岡山県で焼かれた備前焼の壺やすり鉢などもあります。

中国宋時代の貨幣

至道元宝（九九五年鋳造）

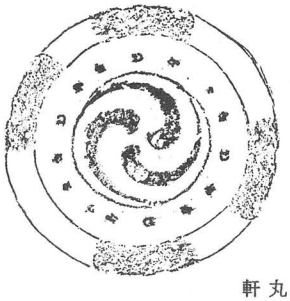


至和元宝（一〇五四年鋳造）

大観通宝（一一〇七年鋳造）

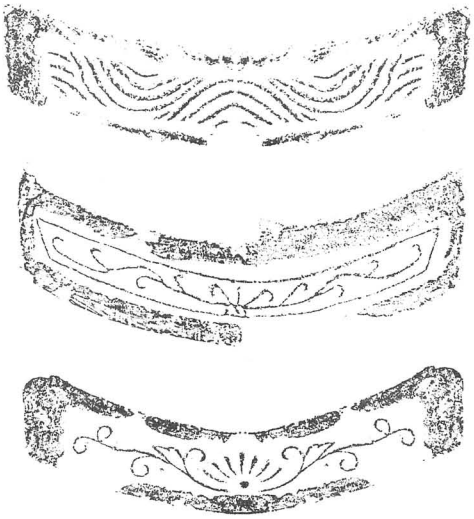
政和通宝（一一一一年鋳造）

◆そればかりか、中国（宋～元時代）から輸入された磁器や、銅銭も出土しています。

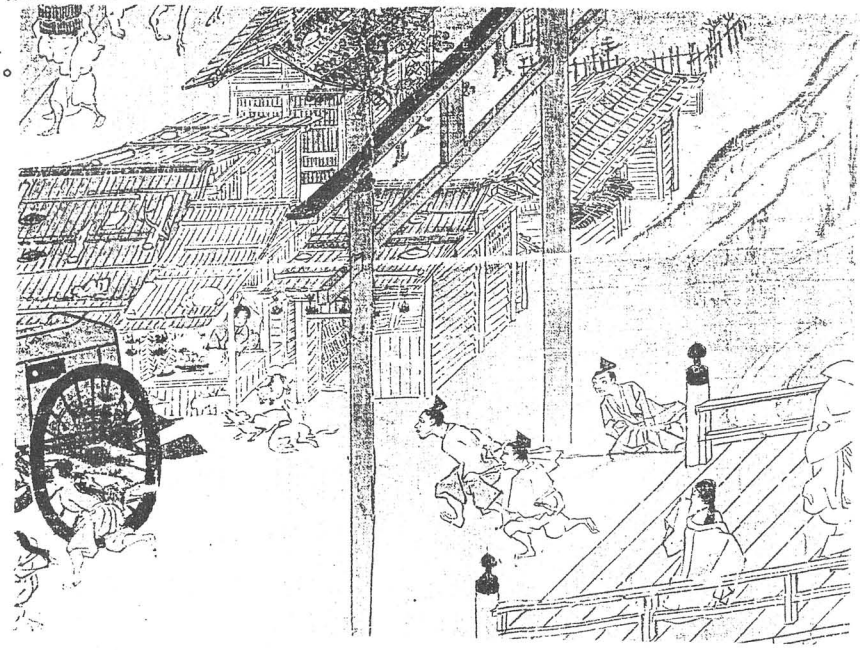


軒丸瓦

◆いろいろな文様をつけた屋根瓦もありました。当時描かれた絵巻物を調べると、この頃の庶民の家の屋根は板葺が一般的で瓦を屋根にのせるのは、寺社や一部の有力者の家だけだったようです。



軒平瓦



『一遍上人絵伝』（鎌倉時代）に描かれた京都四条大橋近くの民家

以上、少しですが展示品について説明しました。これらのものは当時の人々の暮らしぶりを知る手がかりとなるものばかりです。

皆さんも昔の人達がどのような生活を送っていたか、想像してみてはどうでしょう。

『宮川小学校と周辺の遺跡』展
・場所　宮川小学校
・会期　平成10年11月14日～12月１日
・主催　神戸市教育委員会　文化財課

平成９・10年度　神戸市遺跡現地説明会資料集

平成12年３月　印刷
平成12年３月　発行

発　行　　神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町６丁目５－１
☎　０７８－３２２－５７９８

印　刷　　(有)　アロエ印刷
神戸市中央区中町通２丁目３－８
☎　０７８－３７１－３８３１

神戸市広報印刷物登録・平成11年度　第348号（広報印刷物規格　Ａ－１類）

本書は、再生紙を使用しています。